

No. 12

# 皇海

1986~1988



群馬大学工学部ワンダーフォーゲル部

## 目 次

1986年度	合宿記録	夏合宿 鬼首峠～栗駒山	3
		秋合宿 飯豊連峰	7
1987年度	合宿記録	新人強化合宿 日光連山	9
		夏合宿 飯豊連峰	10
		秋合宿 朝日連峰	14
		" 後立山連峰	17
		冬期山行 南八ヶ岳	18
		春期山行 鳳凰三山	20
		春スキー合宿 尾瀬	22
1988年度	合宿記録	新人強化合宿 八ヶ岳縦走	23
		夏合宿 会越国境	24
		秋合宿 飯豊連峰	28
		" 中央アルプス	30
1986年度	個人山行記録		
	4月	八方尾根・山スキー	32
	"	至仏・山スキー	32
	"	芝倉沢・山スキー	33
	5月	室堂周辺・山スキー	34
1987年度	個人山行記録		
	6月	大源太川 北沢本谷	36
	7月	笛吹川 ヌク沢左俣右沢	37
	"	赤谷川 笹穴沢	38
	8月	水長沢本流	39
	"	西ゼン	41

8月	東ゼン	41
〃	湯檜曾川本谷	42
10月	登川 米子沢	43
〃	谷川 ヒツゴー沢	43
〃	二子山(中央リッジルート)	44
1月	松木・黒沢	44
2月	吾 妻	45
〃	松木・黒沢・夏小屋沢	45
〃	尾瀬・山スキー	46
〃	安達太良山・山スキー	47
3月	西黒尾根	48
〃	西ゼン・山スキー	48
〃	シッケイ沢・山スキー	49

#### 1988年度 個人山行記録

4月	南八ヶ岳	50
5月	白馬大雪溪・山スキー	54
8月	一ノ倉沢・南稜	55
〃	仙ノ倉谷・西ゼン	54
〃	槍ヶ岳～穂高岳	56
9月	谷川 馬蹄	58

○ B 住所録	60
部 員 住所録	72

# ' 86夏期合宿 (鬼首峠～栗駒山)

日 程： 7月20日 ～ 7月29日

メンバー： C. L. 赤塚 (3M), S. L. 古庄 (3W)

装備・市原 (3M), 木村 (2K) 会計・生形 (2S)

食料・嘉村 (2W), 土佐 (2M)

気象・浅見 (2C), 糸井 (2L)

医療・平井 (2L), 福島 (2L)

7月20日 曇り

桐生 ■■■ 鳴子 == 鬼首峠 ㊦<sub>1</sub>

桐生を早朝に出発する。先輩の盛大な見送りとたくさんの心温まる差し入れを頂いて、元気に出たのはいいけれど、長い列車の旅で、みんなぐったりしてしまう。小雨降る鳴子駅に到着。ここからタクシーで鬼首峠まで行き国道わきの広場にテントを張る。

7月21日 曇り

㊦<sub>1</sub> (4:45) — (8:45) P 948 (10:15) — (11:00) P 1085

手前の鞍部 — (12:20) P 1085を越えた鞍部 ㊦<sub>2</sub>

AM 2:00起床、外を見るとガスが濃く、視界がきかないため様子を見たが40分遅れで出発。県境の稜線上を40分ほど歩き、P 948 へ向う。北向きの尾根を探すが、視界が悪く見つけるのに時間を食ってしまう。この尾根は、S 57年の夏合宿の際に、先輩方が迷われた所である。その後は順調に進み、お昼過ぎにテン場に着く。気象通報で仙台地方に大雨警報が出ている。明日が心配だ。

(水場はP 1085の手前の鞍部から南西に下り5分)

7月22日 雨

㊦<sub>2</sub> (5:35) — (13:40) P 1298を越えた鞍部 ㊦<sub>3</sub>

今日も雨が降っている。昨日よりも雨・風共に強くなっている。しばらく様子を見て出発する。

始めは順調に進むが、しだいに笹ヤブとつるが多くなり、なかなか前に進まない。それに、体が雨に濡れて寒い。昼食も寒さのためにあまり、のどを通らない。この時ほど下界の蒸し暑さが恋しいと思ったことはない。テン場に無事到着。まだまだヤブに入って2日目。先は長い。

(水場はテン場から北へ5分ほど)

7月23日 雨

沈殿 ④<sub>3.4.</sub>

起床してみると外は風雨が激しい。普通に食事を取り様子を見る。が、いっように弱まる気配がなく、話し合って無理をせず沈殿することに決定する。

9:10の気象通報によると、ちょうど前線が通過しているみたいだ。昼過ぎに多少回復するが、ガスが濃く視界がきかない。沈殿して正解だったと思う。いい骨休めになった。

7月24日 曇り時々晴

④<sub>4.</sub> (5:45) — (5:15) P1298 (5:35) — (5:40) P1238

(9:50) — (10:50) 登山道 (12:10) — (12:30) ④<sub>5.</sub> P1241

を越えて5分。

今朝は雨も上がる。多少ガスがかかっているが、空は明るい。水取りをすまして出発。7時頃一瞬雲間から太陽が顔を出す。全員、思わず立ち止まり、歓声を上げる。今回の合宿で初めて太陽を拝むのだから無理もない。登山道に出るまで、かなり広い尾根で低い木のヤブで、見通しが悪く木に登ったりしながら進む。10時頃になると晴間も見え、ヤブの背も低くなって、これから行く稜線がはっきりと見える。所々に赤布を見つける。登山道が近づいてきたらしい。皆元気を取りもどし走るように進み、11時前に、ついに登山道に出る。(P1191.5の手前)。ここで昼食をとり、甲ら干しをする。P1241を越えた池塘のわきの荷上げ品を回収し、5分ほど歩いた、登山道のわきにテントを張る。

7月25日 晴時々曇り

④<sub>5.</sub> (4:45) — (5:45) P1253の手前 (6:10) — (7:15)

須金岳の下り (7:30) — (9:50) P1125. 竹ノ子森 (10:25) —

(11:15) 水取り。P1046の手前を東に約10分 (12:20) — (1:05)

④<sub>6.</sub> P1046直下

起きて空を見ると星が出ている。今日も天気はよさそうだ。今日から入るヤブは昭和57年の夏合宿で先輩方が行けなかった所だけに気合が入る。ヤブは想像したほど濃くなく、所々灌木のヤブで進むのに苦労する他は順調に進むことができる。10時頃竹ノ子森で昼食をとる。予定テン場まではあと1ピッチぐらいで行けるので、先に進むかどうか話し合う。しかし、まだ時間も早いで、予定テン場で水を取った後で、再度、検討することにする。P1046の手前の鞍部で水取りに行く。水場までは約10分ほどで行ける。水場には雪溪も残っていたが水量はすくなく、水取りをすませ、先に進むかどうか話し合うが、皆の意見は、すでに決まっていたみたいで、先に進むことに決定。

P1046を下った最初の小ピークの手前にテントを張る。

7月26日 曇り時々晴

Ⓐ。(4:30) — (5:30) 山猫森手前1000m地点(5:45) —  
(6:40) P1017手前の鞍部(7:10) — (8:35) P1017下り850m  
地点(8:50) — (9:10) 6日目予定テン場(10:00) — (10:50)  
水取り。P829の2つ前の鞍部(11:55) — (1:05) Ⓐ P829を  
越えて2つ目の鞍部。

山猫森を過ぎた当りから所々に踏み跡らしいものがでてくる。おかげで快適に進む。

P1017の下りは、かなり急な斜面だ。斜面の途中に獣の足跡(熊?)らしきものを見つけ、みんな、動揺しているみたいだ。9時過ぎに6日目の予定テン場で昼食をとる。先に進むが、この先、水の取れそうな所がないようなので、途中で水を取って行くことにする。

P829の手前の鞍部から南へ2分ほど下った所に幅2mほどの沢があった。上流には滝もある。この辺は、沢登りの人達が結構入っているみたいで、わらじや空缶などが落ちていた。P829の次のピークを下った所にテントを張る。ここには以前テントが張られた跡がある。今日は予想をはるかに上まわる距離を進むことができた。明日は必ず花山峠まで出ようと心に誓いつつ就寝。

7月27日 曇り時々晴

Ⓐ (4:40) — (5:40) P866を下った鞍部(5:50) —  
(6:50) — 林道(7:20) — (8:00) 湯浜温泉。(第2荷上げ地)  
Ⓐ。

昨夜7時頃、皆が寝ようかなと思う頃、テントの外をガサガサと歩きまわる音がして、皆、手に手になた・コッヘルetc.をにぎって外に出てみると東の尾根の方にガサガサ登っていくのが分った。皆の脳裏には熊が走り回っていたんじゃないかな、その瞬間、キキキという鳴き声が聞こえて猿だということが分り安心した。

今朝は皆のヤブを抜けるんだ、という意気込みがひしひしと伝わってきて、自然と気合いが入る。

ヤブは薄く、所々踏み跡もあったりして、予定では2ピッチの所を1ピッチできてしまった。P866の次のピークを越して広い尾根に出る。ここからは、北東の方向をコンパスで見ながら、まっすぐ進む。この辺りは林業関係の人が、かなり入っているらしく、踏み跡と青いビニールテープを所々で発見する。7時前に夢に見た林道に出る。大休止の跡、湯浜温泉へ向う。8時に湯浜温泉の駐車場に到着。ここで隠しておいた荷上げ品を回収し荷分けしテン場へ向う。湯浜温泉は沢沿いにあり、川岸に露天風呂がある。温泉に入り汚れを軽く落としビールを飲みまくる。

7月28日 快晴

♣。 (7:50) — (10:10) 栗駒山 — 須川温泉キャンプ場 ♣。

今朝は、のんびり起床。ゆっくり朝食をとり、小屋のおじさん、おばさんにあいさつをして、栗駒山に向う。初めは全員順調に飛ぶように歩くが、このハイペースがたたって、虚空蔵山の手前でSL(私)が、ばててしまい、皆のペースを落としてしまう。少し休んで栗駒山頂に到着。山頂には家族連れや、観光客で一杯で、我々だけブラックホールに包まれているようだ。そそくさと栗駒をあとに須川温泉に向う。ここのキャンプ場にテントを張り、温泉センターで、のんびり湯舟につかる。

ここの風呂は入口は別は奥でつながっている混浴、皆期待に胸ふくらませて奥に行くが、しぼんで帰ってくる。夜は酒を飲みながら歌を歌いまくって就寝。

7月29日 快晴

♣。 須川温泉 — 一ノ関 — 仙台 — 桐生

栗駒を後にする。須川温泉から一ノ関まではバス。一ノ関から電車で仙台へ。ここで下車して解散。皆それぞれぶらぶらして、帰途につく。

後 記

この合宿のコースは、昭和57年に先輩方が出した、神室～栗駒で未踏破の部分を縦走し、先輩方の積年の恨みをはらすために出したコースです。出発点が神室からでなく、鬼首峠からというのが、多少心残りではありましたが……

今、思うと、このコースのメインは先輩方が歩かれた神室から鬼首峠を抜けてP1191.5(登山道)までではないかと思われます。

須金岳から栗駒までは、ヤブは比較的薄く、所々に踏み跡もあり、結構歩きやすい稜線でした。

最後になりましたが、C.Lの赤塚君、本当に御苦勞様でした。他のメンバーのみんなもおつかれ様でした。ここでS.Lとして、数々の至らなかつた点をお詫びします。

(記：古 庄)

## ’ 86 秋合宿 飯豊連峰

日 程： 10月3日～10月6日

メンバー： C. L. ・木村（2K）， S. L. ・平井（2L）  
赤塚（3M）， 浅見（2C）

今年の秋合宿は、8月にはまったく構想が立たず、ようやく9月下旬になって行き先が決まった。これはいつものことであるが、昨年引き続き、目的地に車で行くことにした。これは少人数しか集まらない工学部秋合宿の宿命のようになっている感があるが、車で行くのには、多くの危険がつきまとうので、以後はこういうことがないような配慮をして欲しい。

10月3日

桐生 AM 8:30発 〓 飯豊山荘 PM. 17:00着

この日、桐生はあいにく雨だったが、平井のサニー号で出発。新潟を通過して一路飯豊山荘へ。到着後、宿泊するところを探しに山荘に行くと、一見ガンコそうでいて実はなかなか話のわかるおじさんにテン場代とおふろ代をまけてもらい、気持ちのいいふろにゆっくりつかってその日は寝た。これが別名湯治山行の始まりであったとは、著者は知るよしもなかった。

10月4日

3時半起床。今日の予定は石コロビ雪溪を登り、北股岳をピストンした後、御西岳の小屋までの予定であったが、雨がふっており、軟弱なチーフがひよったことで、その日は沈殿ということになった。テント内で思いきり寝まくった後、再び飯豊山荘で湯治？をして就寝。明日は沈殿できないので明日にのぞみをかけて、いい気持ちで床についた。

10月5日

3時30分起床。晴れている。2晩もそこに泊まったせいか、準備に手間どりAM 6:00に出発した。石コロビ雪溪は、雨のためと、アイゼン不備のため、登るのをやめて、地神尾根を登ることにする。普段の運動不足に加えて、この急な登りは、かなりきいた。そのため、30分ごとに休憩をとることにする。天気はかなりよく、久しぶりにかいた汗が気持ちよかった。湯沢峰を過ぎ、滝見場で、わずかに流れる滝と、石コロビ雪溪をゆっくりながめて、ゆっくりと休みながら、10:45に稜線に出た。さすがに山の上は寒く、こごえながら昼食をとって、門内小屋に正午に着いた。一応今日の予定はここまでで、あとは、希



望者のピストンだけであるが、ピストンに行ったのはC.L.のみだった。単独で行くには抵抗があったが、危険なところはないので、承認を得て出かけた。C.L.はついでに水とりをかねて、梅花皮岳を目指したが、雨のため、北股岳で引きかえすことにする。しかし、降っていたのは、北股岳より向こう側であり、行きも帰りもほとんど雨にふられず、快適であった。一人だけの山歩きを一瞬行なったようで、不安とともに快感を味わえた。小屋に戻ると平井と赤塚さんは深く寝入っており、浅見さんと2人で水を探しに出る。給水設備はあるが、水は出ず、通りがかりの人に聞いたところやはりここはシーズン以外は水がないらしく、雪溪もないとのことだった。しかし、ガイドブックには水場があると書かれているが、すごく汚い池があるだけである。が、とても暇なので水とりに出かけることにしたのである。さんざん歩きまわったあげく、ようやく大量の水が流れているのを発見した。実は歩いて10分から15分のところであった。

夕食を食べたあと、我々のほかに泊まり客がいたので、星空のもとで、酒を飲んだ。星空を眺めるのはとても浪漫ちっく（とたっく）なのであるが、やはりいっしょにいるのは女の子がいいと、しみじみ思う私であった。

10月6日

AM.4:00起床。6:15小屋発——9:30 飯豊山荘着

朝が寒い。ようやく明るくなった6:15頃に小屋を出る。帰りのルートは、行きと違うところがいいと思っていたので、ちょっと問題があったが、丸森尾根を下ることにした。かなり急な尾根であったが、紅葉がきれいで、やっと救われた気がした。4Pをとると、そこはもう飯豊山荘であった。

ここでついにこの山行き3度目の入浴をし、きれいさっぱりした後、桐生に向って車を飛ばした。

今回の山行きをふり返えると、6,000円も使ったわりには、湯治と、少しの山登りだけで、残りは昼寝とドライブだった感がある。

日程的に秋合宿はきついで、十分に計画を練ることを、これからの方々におすすめる。

(文責： 木 村)

## 87 新人強化合宿（日光連山）

日 程： 5月16日 ～ 17日

メンバー： C. L. 土佐融児, S. L. 福島徳明, 新藤洋一,  
木村幸夫, 堀内 隆, 糸井伸雄, 平井智則

5月16日

霧降スキー場（10：00）——（10：50）1550m付近（11：00）——（11：52）  
1950m付近（12：02）——（13：00）2203m（13：20）——（14：13）2295m  
（14：25）——（15：33）女峰 ♂

本来なら新人強化は、2パーティであるはずだったが、2年生が退部してしまったために、もう一つのパーティがつぶれてしまい、そのパーティから糸井と平井が参加してくれることになった。

ほぼ快晴の中、霧降スキー場、駐車場から歩き出す。スキー場の中の登山道を登るが、スキー場が終るあたりは、登りが少しくつく、道がぬかっていたため、少々登りづらかった。ここで約1名寝不足その他のためにくらったが、ほとんどいつものペースで登れた。地図にある赤薙山を過ぎてしばらく行った所で、「赤薙まで20分の道標があり、みんなで「おかしいなあ」と言いつつ進むと、2203mのピークに「赤薙山」の看板が立っていた。地図と看板のどちらが違うのかはわからないが、とにかく地図と標識は異なっていると決め、そのまま進んだ。（後で皇海No.11を見たら、同じことが掲載されていた。勉強不足だった。）尾根にはけっこう雪が残っていたが、このあたりでは、さほど気になるほどではなかった。15：33女峰についたが、気象の時間も近く、唐沢小屋まで降りて次朝に登りかえすのもめんどろうだということで、女峰のピークにテントを張ってしまった。今考えると、とんでもないなまけた考え方だったと反省している。

5月17日

♂（5：15）——（6：27）富士見峠（16：50）——（7：28）小真名子山  
（7：35）——（18：45）大真名子山（9：15）——（10：10）志津林道  
（10：30）——（12：00）バス停「光徳入口」

3：40起床。気温は低く、天気もあまり良くなかった。糸井、平井は12：00ごろまで赤塚さんの差し入れの酒を「のまないとおこられる」と気合を入れて開けようとしたために、起きたときにはまだ酔っていた。

女峰から帝釈山をへて富士見峠までの行程は、登山道にくさった雪がのこり、非常に歩きづらかった。この時期でも、南側の斜面以外はけっこう雪がのこっ

ていた。富士見峠からの小真名子への登りは急なガレ場でつらかったが、セカンドの堀内が、平気な顔でついて来ていたので、気合を入れて直登してしまった。このガレ場は登山道がわかりづらく、またピーク直前は岩場でけっこうしぶかった。大真名子で昼食をとった後、林道まで一気に降り、林道は舗装になってからは、みんな走って降りた。

例年の新人強化より2週間も遅い時期だったが、けっこう雪がのこっていた。気心の知れた連中と行く山の楽しさを再確認できた山行きだった。

## ' 87 夏 合 宿 ( 飯 豊 連 峰 )

日 程： 7月17日 ~ 7月26日 (予備日 3日)

メンバー： C. L. 土佐 (3M), S. L. 糸井 (3L)

平井 (3L), 福島 (3L), 生形 (3合成), 木村 (3K),  
新藤 (3E), 浅見 (3C), 堀内 (2C)

7月17日

桐生 ■■■ 中条 == (17:20) ♂<sub>1</sub>

予定では、7月16日に出発のはずであったが、天気が悪く、1日ずらす。桐生で盛大な見送り(?)を受け出発する。舗装されている林道の終点近くにテントを張る。水場として川が道のわきを流れている。夜になりまた天気が悪くなってきた模様。

7月18日 雨→曇

♂<sub>1</sub> (8:00) — (13:00) P516 を越えた鞍部 ♂<sub>2</sub>

夜中に雨が降り出し、ときどき強く降る。砂地にテントを張ったため6テンが2:00ごろつぶれ張り直す。雨がやまないのの様子を見て、結局8:00出発。尾根の取り付きは、送電線の鉄塔からですぐにわかった。平井の調子が悪そうので体温を測ったら、ちょっと高かったので、下山ということになり、8:30平井一人で下山。

9:15 P422, 9:40 昼食, 10:30 P422 と P495 の間, 11:30 P495 と次の小ピーク。この間はややヤブ(木ヤブ)がこかった。P516の登りで堀内がハチに刺される。13:00テン場着。水とりは西側で往復35分。

夕食は、とん汁で雨にぬれ、やたら酸味のきいた肉であったが、腹をこわ

す者はいなかった。18：30就寝。

7月19日 曇り

♬<sub>2</sub> (4：30) —— 牟礼山 —— (13：10) —— 一本松

2：00起床、4：30発。早速、福島がハチにやられる。やたらとハチが多いのは確かである。6：40牟礼山。ここから先は、ほとんど道のようになっている。7：20 P521 を越えたところ。8：30 P528 をこす。P521 からはやたらとヤブ濃い。相変わらず木ヤブである。9：45 P606 手前でメシ。この後ラストの方にいた生形、土佐が刺される。13：10 テン場着。水場、西側。下り10分、上り20分。

7月20日 曇り→雨

♬<sub>2</sub> 一本松 (5：00) —— (11：40) P848 を越えた鞍部 ♬<sub>3</sub>

2：00起床、5：00発。ちょっと遅い。一本松からの下りは尾根が細くヤブ薄い。また、踏み跡もしっかりしている。6：45 P820 において尾根合流。けっこう見渡しがきき、今までの行程をふり返る。ここからの下りは岩が多い。その分ヤブは薄い。7：00 P718 手前。10：40メシ。この辺りは、稜線の右側がヤブが薄いことがわかる。11：40テン場着。水とり。東側。下り25分。上り35分。夕方から雨が降り出し、早くねる。

7月21日 曇り時々晴

♬<sub>3</sub> (5：20) —— 鳥坂峰 —— (12：50) P912 手前の鞍部 ♬<sub>4</sub>

2：00起床。少しガスがかかっているなので、様子を見る。5：20発。雨で木がぬれているので、トップをジャンケンで決めるが、結局S.L.がトップ。時間のムダであった。やはり稜線を右側少しはずした所がヤブうすい。6：30 P848 の次のピーク。7：40その次のピーク。8：55荷上げ地点到着（鳥坂峰手前）。S.L.（荷上げをした本人）が目印の赤テープに気付かず、先に行ってしまうところであった。昼食を食い、荷分けをする。ここで不調（足首のねんざ）を訴えていた生形を浅見さんといっしょに下山させることに決定。調子がよくなったら杵差で合流しようということで分れる。12：50テン場着。P912 手前の鞍部。水とり、西側下り15分、上り25分。夕食を食ったあと、ごみを燃やし木登りをする。台風の動きが少々不安である。

7月22日 曇り→雨

♬<sub>4</sub> (5：15) —— 大樽山 —— (12：00) P1146 ♬<sub>5</sub>

2：00起床。天気悪いが雨ではないので、5：15出発。予定テン場のP912の先の鞍部は稜線が細く、テン場には適していない。（実は位置を間違えていた）。ここから先の平らなところは、テン場適地である。ここで、木に NUWV. S.56.11.4 と彫ってあり、他にもいろいろあった。6：50 P912 の次の次の

ピーク。ここの下りはやや右にはずした。(登り返すほどではない) 8:00  
大樽山の途中、ナタ目が多い。9:15大樽山。山頂にはビンがあり「関川村山  
の会」の人達の名前が書かれた紙が入っていた。問題のここから下りの岩のマ  
ークの所はたしかにガレているが通行不可能ではなく、稜線がせまいせいで踏  
み跡もかなりあり、意外と楽であった。

低気圧接近のためか、この辺から、風が強くなり、時おり、風にまじって雨も  
飛んできた。12:00テン場着。P1146、雨が本格的に降り出し、すぐにテント  
を張る。水は余裕があるので、水とりなし。(よさそうな沢も入り込んでいな  
い)夜になると雨はやんだ。明日はヤブ突破だ。ところで今日一日ジャンケン  
でトップを決めたが、S.L.は5敗もした。

### 7月23日 曇り

♬。(5:15) — アゴク峰 — 鉾立峰 — (13:00) 杵差小屋 ♪。

2:00起床、5:15発。主稜線の方はやたらと雲がくろい。ヤブ最終日にき  
て、またヤブが濃くなった。P1339のところの池塘は草原状になっていて、す  
ごくきれいなところで、杵差の小屋も見えた。この先、相変らずのヤブである  
が、歌をうたいながら元気よく進む。8:50アゴク峰一峰、三峰南面はスラブ  
状稜線は細いわりにヤブこい。P1467北側に池塘あり。部分的に笹ヤブとなり  
快適。11:00やたらと小ピークがあり地図と違う。12:05鉾立峰の手前の岩場  
を左側の木を伝って登る。とうとうヤブ突破である。頂上で浅見さんと生形と  
再開。杵差までの道のまわりには、きすげなどが咲いていて、きれいなもので  
ある。

小屋は飯豊の他の小屋と違いカマボコ型のものである。主稜線に出てからはや  
たらと風が強く、夜になりさらに強くなりガスも出てきた。

### 7月24日 ガス

♬。杵差小屋(5:10) — 鉾立峰 — 大石山 — 地神山

(9:00) 門内小屋 ♪。

2:30起床、ガス濃く、風強し。雨もときどきまじる。5:10発、視界は20  
mとない。昨日までの天気かうそのようだ。6:00大石山手前のピーク

6:40頼母木小屋、7:50地上山手前、とにかく風強く耐風姿勢をとりながら  
進む。9:00門内小屋着。様子を見るが、そのまま小屋に泊まることに決定  
(素泊り一人1,000円)この風では6テンなど張れたものではない。休んでい  
ると途中下山した平井が病気をなおし、やってきた。びっくりした。木村と堀  
内が水とりに行くがはぐれ一瞬緊張するが、無事。水場は東側。

### 7月25日 強風と雨

♬。門内小屋(8:00) — 北股岳 — 鳥帽子岳 —

(12:10) 御西小屋 ♪。

2:00起床、朝から強風と雨で、停滞のつもりで、朝食を食い、すぐねる。  
7:30ごろ風雨共に弱まり、出発することに決定、8:00発。9:10梅花皮小屋。北股岳の下りで多くの人とすれ違う。10:10、烏帽子の下り。11:10天狗の庭でメシ。12:10御西小屋。やたらと雪溪が多く、何度も雪溪上を渡って歩いた。ガスの中で渡るのはこわいものである。水場は少し東に入った南側。

7月26日 曇り

♣。御西小屋(5:00) — 御西岳 — 飯豊山 — 種蒔山 — 三国岳 — 地蔵山 — (11:30)川入 — 山都 ■■■ 桐生

3:00起床、夜中風雨共に強かったが、雨だけはおさまる。5:00発。

6:30山頂小屋。山頂は何も見えないので素通り。7:25切合小屋。8:20三国岳。このあたりで、コースタイムがおかしいところがあった。三国からの下りはなかなかの岩場で、人がやたらと多い。この辺りから天気が良くなり、実はある標高から上だけが雲の中であったということがここになってわかる。

9:20地蔵、メシ。時間が早いのでこのまま御沢で泊らず、桐生に帰ることに決定し、ここからばらばらで川入りに向かう。全員無事下山し、11:30川入着、風呂に入り山都から桐生に帰る。

今回の合宿は、上級生1名、下級生1名のほとんど同級生だけの合宿となりだれ気味になりがちであったが、やる時はやるの精神で予定どおり途中下山することもなく成功した。

日程の2/3を占るヤブにおいては1日の行程を短くし、ほぼ12:00にはテン場に着くというものであった。ヤブそのものは木ヤブがほとんどでそれほど濃くなくテン場を先に進め、日程をつめようとすれば可能であったが、テン場、水とりの都合を考えれば、十分であったと思う。また、天気はほぼ毎日くもりぐらいで暑くなく、水は確実にとれ、出発の時はいつも満水状態で水の心配がなかったのは心強かった。コースそのものも特に難しい所もなく、問題のガレ場も大したことはなかった。ただ、ピークからの下りで多少コースをはずしたぐらいだった。楽しみにしていた、飯豊連峰の主稜線は、ずっとガスと強風と雨で何もいいところがなかったが、写真、記録等を見る限り、天気さえ良ければ、本当に最高の山であることに違いないだろう。

(記録 糸 井)

# ' 87 秋 合 宿 (朝 日 連 峰)

日 程： 9月30日(水)～10月4日(日) 5日間  
メンバー： C.L. 堀内 隆(2C) 会計 芦名孝一(医進1)  
S.L. 新藤洋一(3E) 医療 山口智義(教1)  
装備 土佐融児(3M) 食料 川崎純子(教1)  
気象 井上俊一(工短2) 気象 早野純子(教1)

9月30日(水)

新前橋(18:07) ■■■■ 新発田駅(22:40)

この日、いきなり上級生が遅刻する。新前橋駅には、すでに見送りの人達が来て賑わっていた。1年生が、差し入れを間違えて、パイナップルとポップコーンが何故か2つずつある。平井は、かぼちゃを差し入れしてくる。前途多難な合宿である。

電車の中では、S.L.がさっそくビールを飲む。湯沢を過ぎる頃には乗客の数も減り俄然盛り上がり、気持よくなったところで列車は新発田に着いた。この夜は、この駅に泊まった。

10月1日(木) 快晴→曇り

新発田駅(6:16) ■■ 鶴岡駅(8:59) == 泡滝ダム  
—— 大鳥小屋(14:05) ♪

5:30起床。6:16に新発田を出発。日本海をながめながらの列車の旅である。

鶴岡駅でRedとフィルムを購入し、タクシーに乗り込んだ。運転手の話では、以東岳の紅葉はちょうどみごろだそうで、我々は登山欲を掻き立てざるを得なかった。タクシーは、ダム手前1kmの所まで入ってくれた。そこで出発の用意をしていると、キスリング部隊も、タクシーから降りてきた。聞くと、秋田大学のパーティで、この日の行動はうちと同じであった。

15分程でダムに着き、そこから1時間で冷水沢の吊橋に着き、昼食とする。ここから1時間(道は、ガイドブックに出ている通り泡滝ダム迄行ったほうが高低差が無く良い)は、ずっとだらだらな登りであるが、池手前からは、かなり急登になる。ここは、short cut で一直線に高度差150mを稼ぐことができる。このためか女の子は、くらっていたようである。池に出た時上部がガスっていたので翌日に不安をのこす。

10月2日(金) 快晴→曇り

♬<sub>1</sub> (5:20) — 以東岳(8:50) — 孤穴小屋(11:17, 12:30)  
— 寒江山(13:30) — 竜門小屋(14:35) ♬<sub>2</sub>

3:00起床。他のパーティが寝ているため、なるべく静かに作業し始める。朝食はチーズがゆであった。それ程時間のかかる物でもなく、チーズもくどくなくなかなか良い朝食であろう。空には、星が輝き今にも降ってきそうである。晴れを確信した。小屋の泊りのため5:00前には、支度は済んだが、明るくなるまで待つて出発する。

以東岳の登りは、標高差の割には、楽に登れた。2ピッチ目で見ると大鳥池が、ガイドブックそのままの美しい風景で、見事に赤、青、緑がちりばめられていた。ここから、紅葉を楽しみながら、ゆっくり登る。以東岳からは、日本海までも一望でき、新たに感激した。この風景を見るだけでも来る価値がある。また、この地の歴史的背景を知っていると違った趣もあろう。(ここは、関ヶ原の合戦の頃上杉家の家臣直江氏が作った軍用道路がある。)ここ的小屋は、ほとんど使用できそうにないボロ小屋であり、水もなかった。中先峰手前あたりからガスが出てきて霧雨となる。中先峰では、秋田大パーティが、昼食を取っていた。何と、小雨の中、大鍋とブスを駆使し、ラーメンを作っていたのである。孤穴小屋も、水場のしっかりしたいい小屋であった。秋田大は、ここでテントを張った。(大鳥池からここまででは時間に余裕がありすぎる。)

ガスは濃くなってきたが、無事竜門小屋に着く。まだニスの香りの残る新しい小屋である。中には宇大のパーティがいた。彼等は、個人ワン(=Pワン)で、翌日は大鳥池へ抜けるとの事。夕食を済ませ、合ワンの時の事を肴に酒を飲んだ。旅先で知人に合うとは楽しい限りである。

10月3日(土) 曇り時々快晴

竜門小屋♬<sub>2</sub> — 西朝日岳(7:20) — 金玉水(8:35~50) —  
大朝日小屋(9:00~50) → 大朝日岳 → 大朝日小屋(10:40)  
銀玉水(11:05) — 小朝日岳(12:10~40) — 鳥原山展望台(13:45)  
朝日鉱泉(17:15) ♬<sub>3</sub>

4時起床。外は、風が強くガスも濃い。宇大は、5:30に出発した。我々は、6:15の出発となる。ここから西朝日岳までは、ガス、風共に強く、耐風姿勢をとりながらの行動となった。ただ、時折景色が見える分工学部の夏合宿(飯豊連峰)よりましであった。金玉水手前で、突如ガスが切れ、眼前に大朝日岳の雄姿が現われた。まるで、ドラマのクライマックスのような素晴らしい自然の演出であった。金玉水は、さすがに冷たく美味しかった。少し休んだ後、目前の大朝日小屋に入った。中でココアを飲んで暖まる。この間に、外は又、ガス、風が強くなってきた。9:50小屋をベースとし、大朝日岳ピストンを行なった。岳は、視界がきかなかったようだが、晴れば綺麗なパノラマが望めるだろう。この小屋も住心地は良いだろう。



小朝日に近付くにつれ、ガスは無くなってきた。銀玉水をのみ、紅葉のカーテンの中を進んだ。小朝日岳は、思ったより急登であった。ここで、昼飯にする。もはや天気図をとる必要もないのでゆっくり進む。鳥原山からは、とてもだるい下りだった。雨の中やっとのことで朝日鉱泉に着き、小屋の主人に幕営場所を教えてもらった。夕飯を作りながら2～3人ずつ風呂にいらしてもらった。風呂代は1人300円也。ナチュラルリストの家はちょっとしたホテルで、素泊まり(学生)2,300円、1泊2食付きで5,000円であった。最後の日がテント生活となったが、快適に過ごす事ができた。

10月4日(日)

♣ 朝日鉱泉(6:00) — 山形駅(9:16) ■■ 前橋駅(18:40)

前日、タクシーに6:00に来るように予約していたので(ナチュラルリストの家には電話がある)、朝3:30に起床とし余裕を持った行動とする。タクシーに2時間弱乗り、山形駅に着いた。そこで時間が来るまで各自自由行動した。山形城は、駅のすぐ近くにあるので見学するのもいいと思う。今は運動公園となっているが広いので暇潰しになるだろう。

9:16の列車に乗り、桐生を経て、前橋に着いた。

『あとがき』

全期間を通して、天候に恵まれたため楽しい山行きであった。この山行きは、(飯豊連峰もそうだが)小屋がかなり整備されているので(特に竜門小屋は62年9月末日に新しくなったばかりである。)これを利用すれば快適な山行きとなるだろう。宿泊料は素泊りのみで、期間中は1000円/人。期間外は500円/人であり、アルプスと違いそれほど負担はかからない。ただ、場所が山形であり山も深いので、まとまった休みの時にのんびりと行く事を勧めたい。

今回、S.L.として参加したが、天候に恵まれたため楽にこなすことができ良かった。また、生活・衛生面においても、各人がしっかりしていたので特に問題はなかった。C.L.も、かなり頑張り、S.L.のわがままに負けずに良くメンバーを引っ張って行ったと感心する。1年生も良くやってくれた。

最後に、上級生として、下級生の面倒を見てくれた土佐君、井上君また、素晴らしい紅葉を演出してくれた自然に感謝します。

(文責: 新藤)

# ’ 87 秋合宿 後立山連峰 (唐松-五竜-鹿島槍-爺ヶ岳)

日 程： 10月1日 ~ 10月4日

メンバー： C. L. 糸井伸雄 (工3), S. L. 平井智則 (工3)  
林慎太郎 (工1), 小高哲茂 (教1)

10月1日

前橋        白馬駅

平井が集合に遅れて、出発が1時間半ぐらい遅れる。車で行く予定であったのであまり影響がなくて、10時半頃白馬駅に向けて出発。白馬駅に4時近くに着き荷物をおろして下山口の扇沢駅に車を置きに行ってくる。バス、電車の接続が悪く再び白馬駅に着いたのは8時を過ぎていた。去年泊まれた白馬駅であるが、今年は泊めてもらえず、仕方なく、駅から徒歩5分ほどの駐車場にテントを張り寝るが遅くまで人が通りうるさかった。

10月2日 (下は曇, 稜線上は快晴)

ゴンドラ・リフト駅 (8:10) — 第一ケルン (9:00—9:20) —  
高松山荘 (12:10—13:20) — 五竜山荘 (15:55)

7時起床。駐車場よりゴンドラ・リフト駅まで歩く。ここで水を入れる。荷物を20kg位と申告したところ、20kgオーバーの荷物代(300円)をとられる。ゴンドラ・リフト、リフトと乗り継いで第一ケルンまで行く。最初のピッチは試験明けの為か体が重い。糸井がバテて小休止。何故か一年生も疲れた様子。そんなわけで30分1ピッチのペースで登る。唐松山荘で昼食。疲れ切っている糸井を残して唐松ピストン。予定は唐松山荘までであったが翌日の行動を考えて五竜山荘まで行くことにして出発。稜線沿いのやせた所に行く。ちょっとした鎖場がある。牛首を下からの巻くコースもあり雨天の時はそっちの方を通るようにと書いてあったが、別にそれほど悪いとは思わなかった。皆疲れていた為、この後はダレにダレて10分1ピッチ。2人組のおじさんパーティーと同じペース。何とか気象通報が始まるまでには着く。水は100円/ℓだった。早々に寝る。

10月3日 快晴

五竜山荘 (7:25) — 五竜岳 (8:15) — キレット小屋 (11:55—  
12:25) — 鹿島槍本峰 (14:25) — 冷池幕営場 (15:25)

4時起床。外は風が強い。風上に寝ていた平井は寒くてろくに寝られなかつ

た。一応食事をするが、沈殿するつもりであったので、少し寝る。風がだいぶ弱くなったので出発することにする。五竜岳手前からさっそく鎖場がある。たいたことはないが1年生は慎重でペースはあまり早くない。五竜頂上は最高の展望。剣がよく見える。五竜の下りはまた鎖場が連続。けっこう楽しいと思っているのは上級生の2人だけか1年生の顔は真剣そのもの。

途中3人組パーティーに抜かれる。キレット小屋の手前で調子に乗って歩いていた林がこけて皆で笑う。キレット小屋で風をよけて昼食。八峰キレットへと向う。八峰キレットは本当に両側がスパンと切れており、思っていたよりすごい。しかし1ヶ所のはしごを除きコースはしっかりと整備されており、難なく通過、谷より吹き上げてくる風が非常につめたかった。ただ夏場など人が多い時すれ違うのは怖いなと思った。北峰へは五竜、白馬方面をながめながら登る。先の3人組が北峰へピストンしている間に北峰へは行かない我々が、再び抜き南峰へ、頂上は360度大展望で富士山や槍がよく見える。ここから冷池まではかっ飛んで降りる。幕営に際して強風の為設営に苦勞する。(後でフライの張りが切れてしまうし、すごい風だった) 水は150円/ℓ。

10月4日 快晴

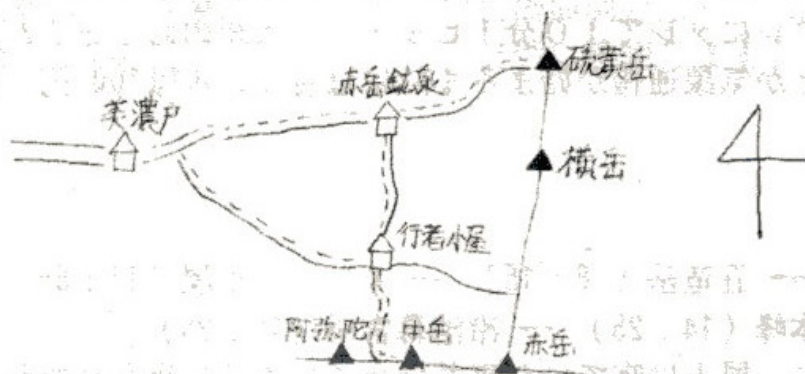
冷池山荘(7:20) — 爺ヶ岳南峰(8:15) — 種池山荘(8:45) — 扇沢(10:30)

余裕の5時起床。ゆっくり準備をして出発。ようやく体も慣れてきて、快調に登る。最後のピークである爺ヶ岳南峰で写真をとりまくってから下山。かっ飛んで扇沢まで降り、車に乗って大町温泉に入り(1人250円)帰路につく。天気にもぐまれた秋合宿であった。(往復約470km)

P. S. 林君は終始皆にいじめられて“ドツボ”にはまっていた。

## '87 冬山(南八ヶ岳)

コース



日程： 12月26日 ~ 12月28日(予備日 日)  
メンバー： C. L. 山口(教3), S. L. 糸井(3L)  
平井(3L), 天津(教3), 堀内(2C), 加藤(1L)

12月26日 快晴

前橋  $\equiv$  美濃戸口  $\text{---}$  行者小屋

日程の都合上、車で行く。早朝 5:00の出発にもかかわらず、多くの人が見送りに来てくれた中、出発 5:45。路面が凍結しているところはほとんどなく 9:00美濃戸口の駐車場に着く。(料金1日500円)小松山荘あたりまで車で入れるが(同じく500円)雪が降ると帰れなくなるのでやめる。10:00まで大量の差し入れを食べる。10:30出発。皆ザックが大きくなっているが見た目ほど重くない。林道はあまりの暖さに、雪解け水が流れていた。11:10小松山荘着。寒暖計を見ると+2.5℃。雪も解けるはずだ。お茶を飲み野沢菜を食べ11:30出発。登山道に入ってから雪が解け氷化しているところがあり、すべりやすいが登りにおいては問題はない。かなりいいペースの2ピッチで、13:30行者小屋着。B・C方式なので、しっかり整地し、テントを張る。さんざんさわいだと、21:00 ねる。

12月27日 快晴

♠  $\longleftrightarrow$  赤岳

4:30起床。今日も快晴のため、予定を変更し、メインの赤岳に行く。

6:50出発。雪は適度にクラストして歩きやすい。登りになるあたりでアイゼンをつける。7:30。中岳と阿弥陀岳のゴル着。少し風が強いが歩くのに支障はない。赤岳と中岳のゴルからこれから登る赤岳の斜面を見上げると、黒い。雪がない。ルートはトレースやアイゼンの跡がしっかり残っていて、まったく問題はない。しかし、ルートの間違えると、岩場で行き詰まる可能性があるから注意が必要だ。8:30赤岳着。本当に雲1つなく、360度視界がきく。

9:00下山開始。皆アイゼン歩行や、ピッケルワークにぎこちなさがなくなっていた。

9:40ゴル。10:00 B.C.着。テン場は赤岳の陰となり、まだ太陽があたらない。10:10ごろやっとあたりはじめる。暇なので、赤岳鉱泉までビールの買い出しに行く。12:15帰ってくる。値段450円で同じであった。14:00ぐらいになると太陽は阿弥陀岳にかくれてしまいまた寒くなる。日照時間はなんと4時間。今夜も十分さわぎ 21:30 ねる。

12月28日 快晴

♠ ( $\longleftrightarrow$  硫黄岳)  $\text{---}$  美濃戸口

4:30起床。今日も快晴である。昨日、メインの赤岳に行ってしまう、気がぬけるところであるが、気を引きしめて6:40出発。7:00赤岳鉱泉。

8:10、硫黄岳着。やはり雪はない。小屋(?)付近は本当に真平であるが北側は絶壁となっており、ガスっていたり、雪庇が出ていたりしたら本当に危険である。8:30下山。9:30赤岳鉱泉。9:50 B.C着。すぐにテント撤収にかかる。10:40出発。下りは特にすべりやすいが、アイゼンをつけなくても、気を付けて歩けば問題はない。もし、こわがっているような者がいたら付けさせればよい。11:45小松山荘。12:30美濃戸口。17:00前橋。

当初の計画では稲子湯からの縦走であったが、メンバーの都合で硫黄と赤岳のピストンとなってしまった。このメンバーだけでも無理だとは思わなかったが、残念である。まあ3日間ずっと快晴であったから、よし、としましょう。

## ' 88 春 山 鳳凰三山

日 程: 3月6日 ~ 3月9日

メンバー: C. L. 原(医4), S. L. 土佐(工3)

記録 堀内(工2), 佐々木(医4),

気象 芦名(医1), 天津(教3)

食料 林(工1)

食料・会計 水沼(工1)

会計 川崎(教1)

医療 大塚(医3)

3月6日

前橋駅(17:25) ■■■■ 蕪崎駅

八王子経由で蕪崎へ向う。さしいれをたいらげ、蕪崎駅の待合い室で寝る。

3月7日

蕪崎駅(4:00) — 夜叉神峠登山口(5:30) — 夜叉神峠(6:30)

— 苺平(10:30) — 南御室小屋(11:30)

駅で朝飯をすませ、まだあたりが暗い中、タクシーで夜叉神峠の登山口まで入る。空が明るんできた頃、歩き始め、1ピッチで夜叉神峠に着く。この間、雪は全然なく、笹が伸びていて歩きづらい。峠の直前そして、峠から平坦な道が続くあたりは、所々凍っているので注意が必要。樹林帯の中のゆるい登りは、大して雪もなく快調に進むが、杖立峠をすぎると多少雪が多くなり、山火事跡から苺平にかけては、雪がモナカ状になっており、道をはずすと大変歩きにく

い。毎日で30分休憩し、南御室小屋へ。小屋の中にテントを張ることにするが、壁が、隙間だらけで、雪が吹き込んでくるので、ツエルトやザックで穴をふさいだ。又、あてにしていた水場は、小屋の周りのそれらしい所を掘ってみたが、見つからなかったもので、あきらめて雪を融かすことにした。小屋には以外に早く着き、晩飯までかなり時間があつたので、さし入れの上毛カルタで、いきなり盛り上がってしまった。

3月8日

南御室小屋 (5:30) — 観音岳 (8:30) — 賽ノ河原 (10:00) —  
地蔵岳ピスト — 賽ノ河原 (11:00) — 南御室小屋 (15:00)

今日は地蔵岳のピストンである。必要な装備以外は小屋に置いて出発する。雪は、輪かん着用でひざあたりまで、赤布を頼りに進むが、少しでも道はずすと腰ぐらゐまで埋まってしまう。しかし、これも樹林帯の中だけで、樹林限界を超えると、めっきり減ってくる。薬師岳小屋でアイゼンを着け、観音と薬師の稜線に出ると、北岳や甲斐駒方面の展望がすばらしい。稜線上は多少風があるものの、雪はほとんどなく、天気も快晴なので、歩いている分には快適である。アカヌケ沢ノ頭付近から賽ノ河原まで、再び雪がでてくるが、それほどの積雪ではない。賽ノ河原で大休止をとり、原さん、土佐、天津、林の4名で地蔵岳をピストンする。帰りは往路をそのままもどるわけだが、トレースがついているにもかかわらず、ペースが上がらない。途中、芦名のアイゼンが片方壊れたが、クラストしているわけではないので事なきを得た。本人もケロツとしている。薬師岳小屋を過ぎ、樹林帯へ入ったところでアイゼンをはずし、シリセードして下り、南御室小屋に3時頃着。

3月9日

南御室小屋 (5:30) — 夜叉神峠 (8:30) — 登山口 (9:00) —  
甲府駅 ■■■■ 前橋駅 (16:00)

小屋の中を片付け、出発。今日も天気が良く、毎平から先では富士山を正面に見ながら下る。途中、大崖頭山でアイゼン着用。芦名のアイゼンは一応修理したが、すぐ壊れてしまったので、片方だけ着けて歩く。夜叉神峠でテルモスのココアを飲み、ゆっくり休んでから登山口へ下る。ここから芦安鉱泉まではいつもなら長い林道を歩かねばならないが、夜叉神荘の小屋のおじさんがいたので、タクシーを呼んでもらうことができた。再び八王子経由で前橋へ戻り、全員無事に下山祝いをした。

## 88 春スキー合宿

日程： 3月22日 ~ 3月25日（予備2日間）

メンバー： C. L. 平井智則（3L）， S. L. 堀内隆（2C）  
嘉村肇晃（3W）， 浅見高志（3C）， 土佐融児（3M）  
木村幸夫（3K）， 福島徳明（3L）， 井上俊一（工短2C）

3月21日 雪

桐生（3:00） == 戸倉（5:30） —— 津奈木橋（7:30）——  
鳩待峠（9:00）

桐生-戸倉間は、車で行ったが、途中3回もチェーンの着脱を行うはめになった。戸倉を5:30にスキーをはいて出発。津奈木橋までの途中少し除雪されてあったが、そのわきを歩いた。（約20分位）その後、所々凍った雪の上を歩く。津奈木橋からは林道はずしてショートカットするが、井上とクライミングサポートのない木村さん、福島さんが、急登を四苦八苦してたようだが、その他の人は順調に歩いた。林道にもどってからも井上は後によく滑った。鳩待峠着。3~4人用の雪洞があったので、それを広げて本日のテン場とした。

3月22日 曇

鳩待峠（6:00） —— 悪沢手前（1866m 付近）（9:30）  
—— 鳩待峠（10:00）

前日にシールを付けておいたスキーをはき鳩待峠出発。順調に歩く。スキーをはずすと、もものあたりまで沈む。悪沢手前1866の付近の急登を登った後、前方は吹雪いていたため、ここから引き返すことにした。スキーはよく滑る。途中、土佐さんがころび（1681m 付近）足を痛めたので、土佐さんはスキーをザックにつけて歩く。鳩待峠10:00着。その後10:15頃、土佐さんが歩いて、平井さんがスキーで着いた。10:30頃、医学部の人々が到着した。

鳩待峠からは至仏山が良く見える。昨日の雪洞はだいぶ天井が落ちてきたため、隣の小さな雪洞を広げて泊った。

3月24日

鳩待峠（7:20） —— 山ノ鼻（8:00~8:20）—— 1850付近（9:20~  
9:35） —— 山ノ鼻（10:00~10:35） —— 鳩待峠（11:50~14:10）  
—— 戸倉（16:20）

至仏アタックメンバー 平井・嘉村・浅見・木村・福島・井上・  
（前日、悪沢より滑降中に土佐が足を痛めたので、ベースキャンプは鳩待峠の雪洞のままで、山ノ鼻には移さなかった。八海山のアタックも中止とし

た。)

午前4時起床。雪洞の為、あまり寒くない。外は吹雪で入口は吹きだまりとなっていたが、中は非常に静かである。朝食を済ませても吹雪はやまず、しばらく様子を見ることにする。7時少し前に風は強いが、晴てきたので、出発を決定する。昨晚の雪がつもっており、スキーはよく滑る。山ノ鼻へはヨセ沢の先で、尾根を1本越してゆくあとは、ほぼ川沿いに進む。山ノ鼻の小屋の近くで、医学部が休んでいるが、我々は至仏への尾根の末端で休むことにして先に行く。樹林の登りも雪は軽く下部もけっこう楽しめそうであると思いつつ登る。樹林限界を越えると風は強くなり雪面がクラストしてくるがシールがよくは効き順調に登る。斜度が急になり始めたあたりでは風がさらに強くなり何人かが後に滑り滑り出す。強行すれば山頂まではいけるとは思ったが、安全を考えてここより滑ることにする。

山頂をめざすにはスキーアイゼンかアイゼン・ピッケルがあった方がよいと思われる。滑降は滑り出しがクラストしていた為エッジのかからないスキーだとまともには滑れないようだった。樹林帯は新雪で気持ちよく滑れた。尾根末端で大休止後、ベースに戻る。

ベースでは堀内の風邪の具合が悪いようなので少し休ませて1日早く下山を決定し、戸倉へ戻る。除雪作業が進んでおり40分位スキーをかついで歩く。

## ' 88 工学部新人強化 八ヶ岳縦走

日 程： 5月3日 ～ 5月5日

メンバー： C. L. 堀内 隆, S. L. 加藤義広  
神保裕紀, 林慎太郎, 水沼一英

5月3日 晴→曇り

桐生 (5:31) ■■■ 小梅 — 麦草峠 (11:30) — 丸山 (12:55)  
— 中山 (14:00) — 黒百合ヒュッテ (14:35)

始発電車で桐生を出発。この時、4日前の新勤コンパで神保に足を痛めつけられた水沼がまだ不調で、足をひきずるように桐生駅に現われる。唯一の見送人、天津さん(教4)に高崎駅で差し入れをもらい、駅を出発する。小梅駅から麦草峠まではバスで行く。(1人1540円である)麦草峠に着くころより天気は曇となる。登り始めて1時間後、丸山の手前で水沼の足が不調で休憩する。ここに来る間も彼は足をひきずるように歩いていたのであるが、けっこう痛むようで結局水沼はそこで途中下山する。麦草峠から3ピッチで黒百合ヒュッテ



に着く。この時期連休でもあり、赤布やテープもあり、トレースもかなりしっかりしているのでルート上特に問題はない。なお、トレースをはずすと雪が腐りぎみなのかサクッとひざから太ももぐらいまで足が沈んでしまうので積雪は50～80cm程度だろう。

5月4日 霧→晴れ

黒百合ヒユッテ (6:00) — 東天狗 (7:05) — 根石岳 (7:50) —  
夏沢峠頂上 (8:05) — (8:25) こまくさ荘 (10:00) —  
本沢温泉 (10:30) — 稲子小屋 (12:05) — 海尻駅 (14:00)

■■■ 桐生

朝起きたらいきなり小雨が降っていた。止むのを待って6時に黒百合ヒユッテを出発する。この時は霧となっているが、南西から強風が吹いている。中山峠に出たところでアイゼンをはき、東天狗を目指す。しかし、ふと下界を見ると雲があるものの晴れていた。雪質は昨日と同じである。東天狗に登るが相変わらず霧と強風である。根石岩手前の中腹ぐらいの所でアイゼンをはずす。東天狗の下りから夏沢峠頂上まで雪はついていない。稜線上を風にあおられながら歩く。夏沢峠に入ると樹林のため風は少ない。こまくさ荘に着いて以後の行動を考える。ラジオで気象通報をとるが、今日いっぱいはこの悪天候が続きそうで、明日になれば回復しそうであったが、下山を決意する。これからは、おいしいところなのに残念である。以後の行動予定としては、硫黄岳—横岳—赤岳—権現岳—編笠山であった。こまくさ荘から下山を開始し、稜線をはずすといきなり風が止み、霧もはれ、本沢温泉あたりでは曇り空からときどき日もさす。雪は本沢温泉に着くころにはすっかり消えていた。天候に恵まれず残念な山行だった。

## ' 88 夏 合 宿

山 域： 会越国境 (浅草岳～毛猛山～末丈ヶ岳～越後駒ヶ岳)  
日 程： 7月16日 ～ 7月28日 (予備3日)  
メンバー： C. L. 堀内 (3C), S. L. 水沼 (2J)  
小菅 (1C), 柱 (1A), 加藤 (2L), 鈴木 (1E),  
林 (2L), 橋本 (教1数), 神保 (2E)

7月16日 曇り

新前橋 ■■■■ 大白川 (17:00) — (19:00) 浅草山荘 ㊦

まだ梅雨もあがらず、朝から雨模様のこの日。コンパスや共同装備を忘れる輩のために電車を一本送らせて、いざ出発。

電車の中で差し入れを処理し、荷も軽くなった頃、大白川駅に着く。ここから浅草山荘のバスをチャーターするが運転手が出はらっていて歩くはめに。

2時間程で山荘に着く。ここの天場は水道も便所も完備されている。天場代は1はり2,500円也。

7月17日 晴→曇り

⊕<sub>1</sub> (4:45) — (10:35) 前岳 — 浅草岳ピストン — 前岳 (12:35)  
— (14:25) 鬼ヶ面山 (14:40) — (16:40) 六十里越分岐 ⊕<sub>2</sub>

天場から7Pで前岳へ。途中、渡渉があるが、何なく通過する。しかし、次に急登がまちうけていた。体調のすぐれない者もあり、なかなか進まない。この急登を登りきると、いきなり道路が現われる。この道路を南方へ数分歩くと、沢がある。水は冷たく、飲料水として最適である。

前岳の手前でザックが壊れる者があり、修理に手間どる。浅草岳ピストン自体は、30分くらいだ。浅草岳途中で雪けいがあり、水もとれる。8月下旬ころまでは残っていたそう。

前岳から六十里越までは4Pであった。前岳からの下りは尾根もやせぎみで道は荒れている。また、小さな起伏が多く、思ったより時間がかかる。また、北岳の登りはかなりきつい。

六十里越の分岐を天場とする。ここから道ぞいに西へ3分程行くと沢がある。水がジョボジョボと豊富に流れていて、絶好の水場だ。

7月18日 曇り→晴

⊕<sub>2</sub> (5:35) — (12:50) 前毛猛山 (13:00) — (14:55) ⊕<sub>3</sub>

前毛猛山すぎの鞍部手前

天場から前毛猛山まで5P。そこから天場まで2P。  
全体的に踏跡あり。快調に進む。

天場より水取り隊西側へ出発。十数分で帰ってくる。水なし。鞍部だと思っていたが、少し手前であると証言。水取り隊東側へ再出発。東へ2分下った所に沢あり。

7月19日 雨

沈殿

朝から雨と霧。このため様子を見る。

9時の気象をとり、回復なしと判断。

沈殿は暇だ。天場の整備をしたり、ゴミを燃やしたりした。

7月20日 曇り時々雨

♣<sub>3</sub> (5:00) — (8:00) P1176 (9:40) — (13:10) ♣<sub>4</sub>

P1268手前の鞍部

P1176まで3P。次の天場まで2P。

天場より少し下り、鞍部の辺りに絶好の天場地がある。過去入山者の天場跡と思われる。

P1176辺りから、尾根がやせこけ、なかなかのスリルものである。P1176から1時間ほどのところに幅が靴のうら程度の稜線が数メートル。細びきを使用して通過する。P1268の手前の鞍部1160m付近を天場とする。天場より東へ5分下った所に水場。

7月21日 雨

♣<sub>4</sub> (5:30) — (11:40) 毛猛山 (11:50) — (14:25) ♣<sub>5</sub>

1390m付近

毛猛まで4P。

天場から30分くらい。P1286手前でいきなり急登となる。ここはガレガレとしていて上部は足場も悪く、つかむ物もあまりない。

毛猛山手前で雨が強くなり、25分程フライをかぶって休む。1400m付近からの急登はわずかであり、苦にならず通過できた。

毛猛山までは全体的に踏跡があったがそれより先はすべて、ヤブである。

毛猛山からの下りはじめは、稜線も不明瞭で小さなニセ尾根がいくつもあり我々も一つ東を下っていた。しかし、早く気づき10分のトラバースですんだ。そののち1Pで天場。1390m付近である。水とりには行かず。毛猛をすぎてからは全くといっていいほど進めない。

7月22日 曇り→晴

♣<sub>5</sub> (6:40) — (10:00) 1200m付近(東の尾根) —

(12:20) P1257 (15:20) — (16:45) ♣<sub>6</sub> 1130m付近

1370m付近で稜線が南西と南南東に分れる。間違え易い所なので、より慎重に進んだが、ガスっていたということもあり、みごとに間違えた。150m程下った所(1200m付近)で稜線がいきなり細くなる。ガスのはれ間の中、西側に稜線が見え、登り返す。登り返し2時間。

P1257でピッチをとり、ここから水とりに東側へ下る。10分程下ると沢がある。

ここから1Pで天場へ。1130m付近。

7月23日 曇り→にわか雨

⊕<sub>6</sub> (5:30) — (10:55) P1215 (11:30) —

(12:40) P1239 (12:50) — (14:15) 1240m付近 (15:25) —

(16:00) ⊕<sub>7</sub> 1260m付近

P1215まで2P。この登りはだらだらと長くつづき、つかれる。しかし、時折のぞくはれ間の中の末丈ヶ岳を目にするとこのつかれも薄れる。

P1239を下り、15分ほど行くと池がある。水はきたない。P1239から1P。P1318.5の手前1240m付近より水とりへ出発。東へ20分下るが沢なし。引き返す。

1260m付近の本稜線と北東へ向っている小さな尾根との間に雪けいがありそこを天場とする。

天場から東へ1分。雪が解け、水がたまり、そこから水が少しずつ流れ出し、水がとれた。たまっていた水はきたないのだが、とれた水はわりときれいだ。またここでカエルの卵をみつけた。C.L.によるとモリアオガエルの卵だそう。

7月24日 晴→曇り

⊕<sub>7</sub> (5:50) — (8:10) P1348 (8:35) —

(10:40) P1323 (11:25) — (13:10) P1352 — (17:00) ⊕<sub>8</sub>

P1326すぎ

朝から天気もよく快調に進む。途中P1348から池溘が見えたがそこには寄らず先に進む。P1323まで2P。たしかに快調である。もう1PでP1352をこえる。P1352手前辺りから踏跡かなと思わせるものが現われるがそれも薄い。P1352の下りはきつく、また、下りはじめは尾根もわかりづらい。

P1326の手前、1230m付近尾根東に雪けいがあり15:30頃、1210m付近より水とり隊と先発隊に分れる。雪けいからは、水があびるほど出ており、十分な水がとれた。

P1326からは登山道が現われる予定であったが、道らしい道はなかった。

P1326すぎを天場とする。

7月25日 晴

⊕<sub>8</sub> (5:10) — (7:50) 末丈ヶ岳手前 (8:40) —

(8:50) 末丈ヶ岳 — (12:10) 泣沢の渡渉点 (12:45) —

(13:55) 国道 — 小出駅 ■■ 前橋

晴れた空の中道なき道を進む。末丈ヶ岳頂上付近に雪けいがあり、手前には草野原が広がっている。ここでピッチをとる。自分の足で歩いた山々を眺めるのはとても気持がよい。雪けいからは水が出ている。

末丈からは登山道があるが、所々くずれたりして荒れている。またP974下の道は斜面を横ぎっていてとても歩きづらい。

泣沢の渡渉点まで4P。泣沢の渡渉は道なりに行くより黒又川との合流点付近を渡るほうが安全そうなので、そちらへ回った。泣沢を渡った所に小屋があったが人はいたのだろうか。

しっかりした道を35分ほど歩くと、シルバーラインとの交点で、車を見かけ大き過ぎる。ここから25分で国道に出る。名ばかりの国道だ。

日程や各人の疲労度などを考慮し、越後駒はパスした。残念である。枝折峠で荷上げ品を回収し、ひたすら下る我々であった。

(記：水沼)

## 88 秋合宿 飯豊連峰

日程： 10月1日 ~ 4日

メンバー： C. L. 神保裕紀 (工2), S. L. 加藤義広 (工2)  
山口裕之 (工1), 小川洋一 (工1), 川崎純子 (教2)  
鈴木美穂 (工1), 水池大輔 (医進1)

10月1日 曇り一時雨

新前橋駅 (16:25) ■■■■ (22:25) 坂町駅 凸<sub>1</sub>

この日は坂町駅でステーションビバーク。坂町駅内での宿泊は出来ないの  
で、駅の外の軒下の幅が2m位なのでエスパースを張り、23:30就寝。また駅前に  
ローソンがあり酒も売っているのでこれは使えよう。ただし営業時間は7:00~  
12:00。

10月2日 晴→曇り

凸<sub>1</sub> 坂町駅 (6:49) ■■ (7:32) 小国駅

(8:15) 飯豊山荘 (8:30) — 湯沢峰 (10:25) —

(11:30) P1145 (滝見場) (12:05) — (12:45) 五郎清水 (13:15)

— (14:05) 1650mの地点 (14:20) — 扇ノ地紙 (15:35) —

(16:00) 門内小屋 凸<sub>2</sub>

3:00ごろ朝日新聞の荷を駅に下していくトラックがうるさく皆よく眠れな  
い。6:00起床で小国駅へ。そこからタクシー(マイクロ)を使って飯豊山荘  
に行く。料金は1台7500円。

梶川峰への登山口は近くの湯ノ沢を渡った所にすぐある。取付けから延々と  
急登で、寝不足もあり、皆ペースがあがらない。登山口から2ピッチ目で湯沢  
峰を通過、続く3ピッチ目でP1145に着く。途中2カ所倒木あり。P1145の稜

線から南側に50m位行くと滝見場で、そこから梅花皮滝、石転び沢の雪溪が見え、今年起きた土砂くずれもよく見える。そこから1ピッチで五郎清水に着く。水場は北側に少し下った所にあり、ここで水を補給。門内小屋でみずが取れないためである。おいしい清水であった。梶川峰までは急登だが過ぎたところからうって変って緩い尾根で視界も広がる。この辺りから紅葉が見られる。五郎清水から扇ノ地紙まで2ピッチ半、扇ノ地紙で主稜線に乗り門内小屋へ。この日は小屋泊り。小屋は立派な造りだがトイレは鍵がしてあり使えなかった。門内池の水は汚なく、夏場利用されるであろう雪溪もこの時期なく、小屋の外に天水による水道があり、一応少量だが水は出るが、しかし結局門内小屋では水は取れない。行動に余裕があるなら梅花皮小屋まで行くことを勧める。

20:00就寝。

10月3日 晴

♬<sub>2</sub> (5:40) — (6:30)北股岳(6:50) —  
(7:00)梅花皮小屋(7:20) — 鳥帽子岳(8:05) ——  
(8:35)亮平ノ池(8:55) — (9:40)天狗の庭(9:50) ——  
(10:35)御西小屋(11:20) — (12:20)大日岳—ピストン(12:40)  
—— (13:30)御西小屋(13:50) — (14:50)駒形山(P2038)  
(15:00) — 飯豊山(15:20) — (15:40)頂上小屋 ♬<sub>3</sub>

4:00起床。出発してすぐ、門内岳を過ぎ北股岳に。そこから一気に下ってすぐ梅花皮小屋である。門内小屋同様ここもこの時期無人開放で造りも良い。水場は道はずしたところにすぐある。主稜線はあまり高低さがなく緩やかなので紅葉の中快適に歩く。鳥帽子岳からは飯豊連峰がよく見渡される。御西小屋に着くころになると雲が出始め、大日岳上部はガスに包まれて見えない。御西小屋で昼食を取り大日岳へピストン。上部に近づくころからガスに包まれる。展望がきかないのが残念である。ピークを踏んで再び御西小屋へ。ここも先の小屋同様、また次の頂上小屋もこの時期無人開放である。造りはしっかりしていて大変良い。水場は南側の斜面をしばらく下った所にあるらしい。本来ならここが今日のテン場であったが明日の行動を軽くしようと思い、頂上小屋へ向う。

御西岳は御西小屋からすぐであるが、ピークというより草原であった。駒形山を過ぎて飯豊山へ。頂上から北にダイグラ尾根が伸びている。飯豊山から頂上小屋まではすぐである。今日も小屋泊り。水場は小屋の南の一王子の手前から東側に少し下ったところにある。歩いて5分ぐらいで赤布があるのですぐにわかるだろう。御西小屋のトイレはたいへんしっかりしたものだがここのはドアが壊れていて使えなかった。夜になって外に出ると夜景がよく見えた。

20:00就寝。

10月4日 快晴→晴

♨<sub>3</sub> (5:15) — 草履塚 (6:05) — (6:25) 切合小屋 (6:40)  
— (7:45) 三国小屋 (8:00) — 剣が峰 (8:35)  
(9:10) 地蔵小屋 (9:35) — 御沢小屋 (11:30) —  
(12:00) 飯豊鉱泉 (13:00) — (13:40) 山都駅 (14:49) ■■■■■  
(21:16) 前橋駅

3:30起床。昨晩は寒かった。霜柱ができていた。出発して20分ほどで朝日を迎える。最高の景色、気分である。文句なく綺麗であった。頂上小屋と草履塚の間の鞍部の手前の下りに1カ所鎖場あり。さらに切合小屋から三国小屋へと向う最後の下りに1カ所鎖場あり。三国小屋から地蔵小屋までは途中剣が峰があり三国小屋直下からそこまで岩稜であるが、別に問題はないと思うが、悪天候の際は一応注意したい所である。途中1、2カ所鎖場あり。地蔵小屋に着くと後は下るだけである。一気に下りたいが深くえぐられた溝状の道で歩きづらい。また、雨の日は沢登りと化してしまうのではなかろうか。とにかく1ピッチで御沢小屋そして飯豊鉱泉へ。鉱泉の宿の人がいなくてまた時期はずれであいにく温泉には入れなかった。マイクロで山都駅へ。1台7500円。そして郡山経由で前橋へ。比較的天候に恵まれた気分のいい山行だった。

最後に水は門内以外はこの時期取れるであろう。また各小屋がしっかりしてまばらにあるので小屋泊りを想定すれば、装備の軽減ができる。エスケープルートが特にないので、その辺を注意すれば、コース上特に問題はないと思われる。

(記録：加藤)

## ' 88 秋 合 宿

山 域： 中央アルプス (木曾駒～宝剣～南駒)

日 程： 10月1日 ～ 4日

メンバー： C. L. 林 (2L), 井田 (化1)

S. L. 水沼 (2J), 山田 (医進1)

小菅 (化1), 福島 (4L)

10月1日 晴

高崎 ■■■ 駒ヶ根 — しらび平 <sup>ロープウェイ</sup> 千畳敷 (14:25) —

— (15:30) 木曾駒キャンプ場 ♨<sub>1</sub>

前日までの雨もあがり、朝から晴ればれとした気分の中我々は出発した。しらび平から千畳敷までロープウェイを使用したのも、この日の行動は、わずか2時間弱であった。

千畳敷から宝剣の手前までの急登は、道もしっかりしており、また、ほとんどハイキングコースなので、別に問題はない。

天場は、木曾駒キャンプ場である。ここは、頂上山荘のところであり、天場代は600円で、水と便所がついている。ちなみに、便所だけ借りたいという場合は1回100円とられるそうだ。

### 10月2日 曇り

♣<sub>1</sub> (5:30) — (5:40) 木曾駒ヶ岳 (6:00) —

(6:05) ♣<sub>1</sub> (6:50) — (7:10) 宝剣岳 (7:25)

(10:40) 檜尾岳 (11:25) — (14:55) 木曾殿山荘 (15:05)

(16:55) 空木岳 (17:05) — (17:15) 駒峰ヒュッテ ♣<sub>2</sub>

朝、天幕をそのままにして、木曾駒ピストン。駒から朝日を拝もうと、それに合わせて出発。すばらしい景色であった。

宝剣岳は、岩々としていてくさり場が数ヶ所あり、雨でも振っていると、すべったりして、危ないなという印象を得た。

この日、体調の悪さと、荷の重さから、くらう者が出現し、ペースは遅いの一音であった。この遅さから、予定を変え、木曾殿山荘に泊まることになるが、下調べの甘さから、無人のはずのこの山荘に人がいて、しかも、1泊3,500円。また天場もないとのことなので駒峰ヒュッテへ向かう。

駒峰ヒュッテは、この時期は無人で、夏期のみ営業しているようだ。(1泊2,000円)ここは、天水がタンクにためてあり、水はこれをもらった。内部は、板の間があり、一部2階の簡素な造りであった。

天幕は張らなかったが、寒そうなので、天幕をかけて寝た。

### 10月3日 曇り

♣<sub>2</sub> (7:25) — (7:35) 空木岳 <sup>ピストン</sup> (7:45) — (7:50) ♣<sub>2</sub>

(8:10) — (11:40) 池山避難小屋 (11:55) — (1:10) タクシー

前日、体調の悪かった者が回復しないどころか、むしろ悪化していたので、下山することに決定した。

下山することを残念がる者もいたが、これはしかたのないことで、この者たちへのせめてもの慰めということで、希望者のみ空木岳ピストンを行った。

下山は、天場から、ただ下るだけであったが、思っていたより長く時間がかかった。



## 八方尾根・山スキー

日 程： 1987年 4月19日  
メンバー： [山スキー] C. L. 佐々木 (MⅡ),  
系井 (3L), 平井 (3L).  
[ゲレンデ] 村田 (MⅢ), 倉本 (MⅢ),  
黒崎 (医進1, 入部せず).

医学部と白馬の駐車場で合流することで出発したが、途中、工事にひっかかり、夜のうちに到着するのをあきらめかけたが、強引に突破。どうにか23:00頃着く。車中泊。翌日、車でゴンドラ駅近くの駐車場にとめ、出発。ゴンドラ、リフトで第一ケルンへ。雪は少なく、かなり岩が露出している。天気は良く、暑い。P2554手前でスキーをデポし、唐松を目指す。唐松までは、アイゼンを付ける必要もなく行ってしまった。デポ地点までもどり、めしを食い、滑降開始。天気が良過ぎたため、雪は重く、スピードも乗らず、最低である。第一ケルンまではすぐであった。この後は村田さん達と合流し、ゲレンデ(コブだらけの斜面)で遊ぶ。

※記録がなくなってしまったので、詳しいことを知りたい方は「皇海」No. 11 P104を参考にして下さい。

## 至仏(山スキー)

日 程： 1987年 4月8日~9日  
メンバー： C. L. 赤塚 (4M), S. L. 系井 (3L),  
平井 (3L), 原 (MⅡ).

4月8日 晴れ

前橋 〓 戸倉 〓 鳩待峠

早く行き、まず至仏を一本すべろうという計画で早めに戸倉に着くが全員寝不足のため、しばらく寝てから、出発することにする。2時間ぐらい寝て、8:00過ぎ出発。少々風が強く、雪もちらつく。林道は除雪が進み歩きやすい。(下りは滑れない。)途中からばらばらになり、若者は2人で先に行ってしまう。13:00頃、鳩待着。ビニールシートを忘れたので、小屋のテラスに幕営。

4月9日 晴れ

鳩待 〓 悪沢ノ頭 〓 小至仏 〓 至仏 〓 鳩待

朝から天気は良い。その分、冷える。7:00発。2人弱で至仏着。悪沢ノ頭と小至仏は直下を巻いた。滑降は雪もしまっていて、最高に気持ち良い。ピークをふり返りながら、15分ほどでおいしい所は終わる。もう1回滑ろうという案もあったが、パス。下まで行かずに、沢をわたり、鳩待への斜面を登り返す。テントから至仏をふり返ると、4人のシュプールが見える。戸倉への下りは雪もなくなり、さらに除雪も進み、文句を言いながら下る。途中でスノーボード(赤と青)を拾った。

## 芝倉沢(山スキー)

日 程: 1987年 4月24日

メンバー: C. L. 原(MⅡ), 村田(MⅢ), 糸井(3L),  
平井(3L).

天気は曇り、楽をして行こうと、ロープウェイを使って、天神平へ。ここから歩き出すと、スキー場からぬけるとヤブっぽく、歩きづらい。熊穴沢小屋で小休止。ここからは、ずっと登り。肩の手前は、急斜面でちょっとこわい。

11:00谷川岳着。結局、西黒を使って登ったのと、大差はなかった。一ノ倉まではスキーをかついでいたのだが、テールが岩にひっかかり大変である。芝倉沢源頭といっても一ノ倉よりで昼食をとっていると、下から沢通しに登ってくる人が随分いる。さて、滑りはじめると、上部は急で大変である。S字をぬけたヤブの下でめしを食っていると、ブロックが2個ほどこちら目指して落ちてきた。あわてて、下りはじめ。下部では少しヤブをこいで、虹芝寮へ。ここからは雪もなく、ひたすら歩き、土合へ。

## 山スキー（室堂周辺）

日 程： 1987年 5月2日～5月5日（予備日なし）  
メンバー： C. L. 系井（3L）， S. L. 平井（3L），  
土佐（3M），市原（4M），藤井（OB）。

5月2日

前橋 ≡ 扇沢 ≡ 室堂 — ㊦ ≡ 奥大日岳

系井、平井、藤井の3人で先に前橋を出発する。扇沢からアルペンルートで室堂へ 9:15着。テン場を探し、室堂平をさまようが、結局雷鳥平に指定のテン場がありここにはる。10:15。11:00奥大日岳に向け出発。トレースぞいにトラバースし、室堂乗越の先あたりに出る。ここから稜線上を行く。進行方向に対し、右側に大きな雪疵が出ているので、注意。登りは特に問題なく、12:40着。昼めしを食い、13:00。いざ滑降というところで、ガスってくる。様子を見て、ガスがうすくなるのを待ち、目標を定め一気に下る。雪はざらめ状でそれほど重くなく、滑りやすい。室堂乗越をすぎ、P2390を越したあたりからテン場を目指し、下降。14:20着。水場は近くの小屋のところにあり、ホースからあふれていた。トイレは小屋の中。

5月3日

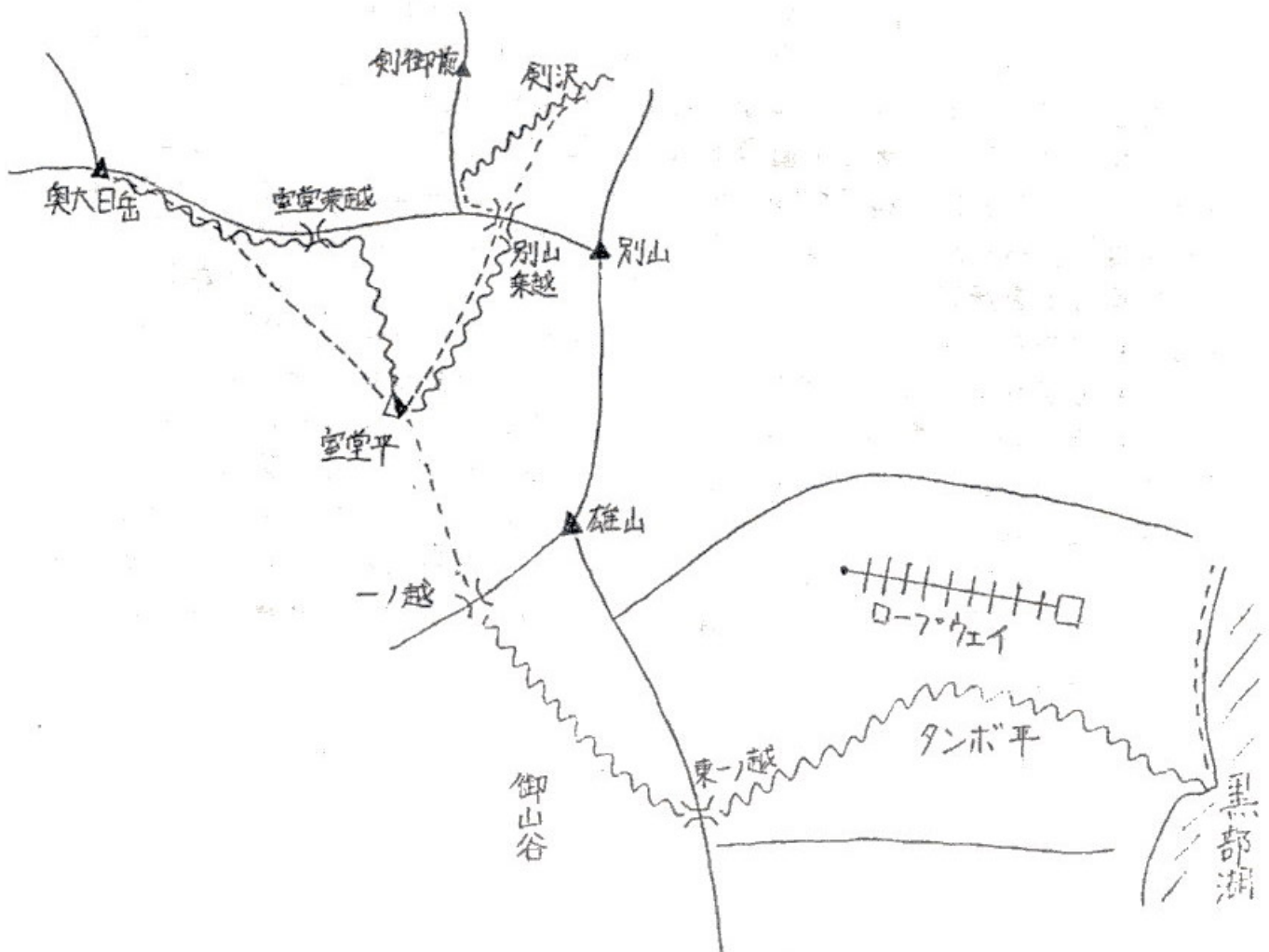
天気悪く（雪が降った）沈澱。平井は雪目で苦しんでいる。12:00頃、土佐、市原、医学部がやってくる。このテント村の中からよく見つけたものだ。

5月4日

今日は天気が良い。剣沢に向かう。6:45発。雷鳥沢を登るがクラストしていて登りづらい。人が多いが、ほとんどは普通のスキーブーツである。7:45、別山乗越を越え、P2792。8:15滑降開始。表面に新雪が10cmほど積もっていて、気持ちが良い。ところどころデブリがあったが、板をはずすことなく、順調に真砂沢ロッジ（雪の下）まで下る。9:00。ここからは登り返しである。天気も良く、目が疲れる。10:30医学部とすれちがう。10:45剣沢小屋。ゆっくり休む。12:45別山乗越。今度は、雷鳥沢を滑る。13:00発。一日中天気が良かったので雪は重く疲れる。13:30テン場着。市原は一人で先に帰る。剣沢は特に危険な所はなかったが、確か危険区域みたいなものに指定されていたと思ったが・・・。

5月5日

今日はあまり天気が良くない。くもりである。7:00テン場発。8:15一ノ越。ここは風が強く、やたらと寒い。みんながそろそろのを待ち、8:45発。東一ノ越に向けて、スキーでのトラバースが続く。急斜面で緊張感がある。土佐は医学部といっしょに御山谷を下って行ってしまったので、3人だけで東一ノ越へ向かう。途中、雪がなく、板をはずす。9:30着。ここからタンボ平に向けて下る。上部が急で滑りづらい。タンボ沢に入り込まないようにとガイドブックにあったが、行けるかもしれないと思い沢沿いに滑る。10:30滝が現れ、あきらめ、登り返し。ロープウェイ駅を目指す。滝のところでストップしていると、一般スキーヤーが2人でやってきて、我々の後をずっとついてきた。危そうでやっかいな連中である。11:30駅着。ここからは道沿い(雪の下)に尾根を下るが、雪がなく板をはずす。12:30ダム着。扇沢で土佐、医学部と合流し、前橋に帰る。



# 大源太川 北沢本谷

日 程： 1987年 6月28日

メンバー： 平井、土佐、糸井、堀内、藤井（OB）、豊島（OB）。

桐生発（4：00）—— ヤスケ沢出合（6：45着、7：10発）——

渡渉点（7：45）—— 山頂（11：00着、11：30発）——

ヤスケ沢出合（12：50）

医学部の部室に寄って、藤井さんと合流して出発。小雨混じりで今一つの天気であったが、関越のトンネルをぬけると、そこはまっ青な空があった。この天気の変わりようにはびっくりした。ヤスケ沢の出合まで車で入る。最初、道をまちがえて、やぶを少しこすことになる道は左側に林道がある。二回目の渡渉点より入渓。再び登山道が横切るところまでは、小さな滝はすべて直登し、快調に行く。セツ小屋裏沢と出合い、その上部の4m滝は釜を腰までつかり右から直登。次の3m滝は釜が深かったの左より小さく巻くが、草付で少々いやしかった。強行突破して直登もズブぬれ覚悟なら、右側より容易に行けそうだった。沢が右折する7m滝手前には大きな雪渓が残っていた。7m滝は水流右を直上。ホールドは豊富で、簡単に登れる。その上部にも雪渓が残っており、雪渓の上を通過して三俣の20m滝に取りつく。20m大滝は右のリッジを直上しやや右のブッシュに入り、少し上に行くと踏み跡が左へついており落口へ。右のブッシュに入らず左へのトラバースはいやらしい草付になっていて、行かない方がいい。豊島さんは、左壁から左側のブッシュから落口におりるルートをとる。上部7mのチムニはシャワークライムで抜ける。後の者に水をかけて遊んだ。最後はスラブ状の岩場を水線沿いにつめて、頂上直下の道に出る。

天気が非常によくて、シャワークライムをして気持ちよかった。結構、楽しめる沢だと思う。下降はヤスケ尾根を下降した。帰りは越後湯沢で風呂に入って帰った。

# 笛吹川ヌク沢左俣石沢

日 程： 1987年 7月4日～7月5日

メンバー： 平井、土佐、糸井、堀内、豊島（OB）

駐車場(6:10) —— 堰堤上部(6:50) —— 登山道(10:00) ——  
—— 駐車場(11:40)

7月4日

医学部の部室を夕方6時に出発。豊島さんとは三富村営の駐車場で落ち合うわけであったが、我々が着いたのは11時半ごろ、周囲はまっ暗でガスっており小雨までパラついていて、豊島さんのスカイラインがどこにいるかわからなかった。とりあえず、雨の中テントを張って寝る。

7月5日

朝5時起床。夜中一時、雨が強かったが、とりあえずやんでいた。食事をして出発。豊島さんは下の駐車場にいた。出発のときは小雨がパラついていたが、遠くからやってきたので強行する。ガイドブックによればヌク沢橋から溯行した方がよいとあったので、ヌク沢橋から入る。最初少し行き過ぎてしまい、戻って溯行開始。堰堤を越えた所でわらじをつける。しばらく川原歩きが続く。

2段6mの滝は水流左側を直登できる。右壁も登れるが、最初少しかぶっている。上部はホールドも豊富でやさしい。高巻きは少しもどって左岸を小さく巻く。その後は再び単調なナメやゴーローが続き、快調に進む。二俣は雨のためか、二俣というより三俣になっていて、水量はほぼ同量に分けていた。右手には林道のガードレールがついたりっぱな橋が見えて、みんなで“ダセー”を連発していた。奥の二俣は右に入る。ここより上部はまあまあ楽しかった。大滝は最初右より取りつき、傾斜がゆるくなった所で左に行き、水流左を直上する。ここで上部よりの下降パーティーがいて、登るのに少しじゃまであった。

雨は一段と強くなり、水は非常に冷たく感じた。2段目は3条の水流のうち中央の水流の左より取りつき、直上。途中で右にトラバースし、草付きを右に斜上。その後ルンゼ状のところを直上し、やぶに入って落口へ降りる。ザイルを出せば残置ボルトも豊富で全て直登できそうだが、落口付近は渋そうだった。

3段目は水流沿いに直上。その後は何なく通過した。途中状流となるが、両側のガレに入らず水流を忠実につめると、正面わずか右のガレに樹林に入るしっかりした踏み跡があるので、踏み跡をたどればすぐに道に出る。下降は近丸新道を下る。下に降りる頃には天気は回復しておおぞらが広がっていたので、

しゃくにさわった。岩は、ところどころぬるぬるしている所があるので注意が必要。また入渓点は、近丸新道の徒渉点からの方がいいと思われる。

## 赤谷川 笹穴沢

日 程： 1987年 7月12日 雨  
メンバー： C. L. 平井, S. L. 土佐,  
豊島 (OB), 藤井 (OB).

川古温泉(8:00) —— 笹穴沢出合(9:30) —— 平標山の家(14:20) ——  
—— 林道(15:00)

ビアパーティーの翌日、2日酔いを押して出発、川古温泉に向かう。下山口の林道に車を1台おきに行ってから出発。林道を歩く笹穴沢出合で、某T君が2日酔いのため不調を訴え、車にもどる。出合でわらじをつけ出発。最初の3m滝は腰まで水につかって、直登。次の3mは釜が深い為に右手より高巻く。

その後はダルイゴーローが続く。金山沢出合で小休止。その後の滝はすべて直登。大ナメ手前の20m滝は、左手の草付を高巻くがいやらしい。右手の方が容易のようだった。大ナメ手前より雨が降りだし、岩がぬれて滑りやすくなる。大ナメは岩がヌルヌルしていやらしい為、右手より高巻き、ナメの中段付近で沢床に戻る。そこから水流左により、左手をいき、途中右手にトラバースして右手を直上して、大ナメの落ち口に出る。その後、10m滝付近にスノーブリッジがあり、左手より高巻く。その後は本流を忠実につめ、ヤブこぎなしで登山道に出る。そこから平標山の家に降り、小休止の後、下降。車をおいた林道に出る。その後、川古温泉のT君を回収して帰る。雨の日は、この沢は岩が滑りやすく要注意。

# 水長沢本流

日程： 1987年 8月2日～4日

メンバー： C. L. 平井, S. L. 土佐.  
系井.

8月2日

仙ノ倉山荘(13:00) — 矢木沢ダム(15:30) (約100km)

矢木沢ダムへの道が夜間通行止めなので、昼のうちにダムまで行ってしまふことにして出発。途中、水上で買い出しをする。まだ寝てしまうには早いので、明日歩く道を見に行ってから寝る。

8月3日 曇のち快晴

矢木沢ダム(5:20) — 大白沢出合(9:20) —

— 東千ヶ倉沢出合(10:30) — 割の萱沢出合(12:00) —

— 水長沢出合(13:00)

朝2:30に起床して朝食を取るが、外はまだ暗いので一寝入りして出発。

奥利根湖沿いの道はヤブっぽい道でだるい。大白沢を過ぎだ所で2人のパーティーとすれ違う。本流を目指したそうだが、天気が悪いので戻る途中であった。その2人組に、東千ヶ倉から先は道は不明瞭でヤブもすごいので奥利根湖に降りて行く方がよいと聞き、そのように進む。ここでかなり時間が短縮される。割の萱沢手前は傾斜が強く途中まで強行突破する。危険とみてヤブに突入するが30m足らず進むのに1時間近くかかる。割沢から先は水が少かったので、本流に降りて本流沿いに行く。何回か渡渉するが、1回腰上があっただけであとはひざ上程度であった。本流の水は冷たく、足がだるくなった。水長沢出合は思ったより水長沢の水量が少ないので、違うのではと思い、少し本流を行って確認した。雨も降りそうもないので河原にテントを張り、たき火をして服をかわかした。ここは魚(ハヤ)がたくさんいて、静かでいい所であるが、岸には増水の跡もあり1mや2mはすぐに水位が上がりそうで、あまり安全な天場とはいえないと思う。



8月4日 晴れ

水長沢出合(5:20) —— 魚止滝上部(7:30) —— 文神沢出合(8:15) ——  
—— 15m2条滝上部(8:30) —— 白沢出合(9:20) ——  
—— 銅の沢出合(10:30) —— 稜線(12:30) —— 平ヶ岳(13:00) ——  
—— 玉子石(14:05) —— 平ヶ岳沢渡渉点(14:45) ——  
—— 中ノ岐林道終点(15:00) —— 林道入口(18:30) —— 銀山湖(18:45)  
—— 小出駅(19:40, 21:05) ■■■ 土樽(22:00) —— 仙ノ倉山荘(23:00)

本流を渡渉(又上)して水長沢へ入る。長いゴーローが続く。水量が多いのでへつりの連続となるが、すべてドボンとやる事数回、僕はころんでカメラを流しそうになる。大日陰沢出合は深い釜で左に泳いで取りつくか、左岸のバンドをへつり大日陰沢の滝の下を通過するかで、どっちにしるビショぬれになる。我は左岸をへつる。魚止滝は直登可とあるが、水量も多く流れは速く、巻く方が無難。ガイドブックには20m上がると踏み跡があると書いてあるが、そんなものはどこにもなく、左岸の大高巻きとなり時間をくう。その上のゴルジュも手がかかず左岸より高巻くが、こっちはバンドが走っており容易。文神沢出合は、右岸の台地を草などはらえば2~3張り程度の広さの天場あり。日向沢出合8m滝は右壁でホールドは豊富。15m2条滝は、左の水流右側が楽に登れる。このあたりの滝はすべて直登できる。ゴルジュの中は小滝が続き、へつり気味に越える。出口の2mは泳いで取りつこうとするが、ザックの重みで失敗。おまけに水温が低いので凍えてうまく登れなくなってしまうが、右岸の残置シュリングを使い越える。白沢出合をすぎると再びゴルジュとなり、ここが核心部である。4m斜瀑を越え、次の6mは右のリッジを快適に登り水流を横切って右岸に取り付き、残置ピトンを利用してへつり、4m滝を越える。

最後の7m滝は、ザイルを出して右壁を巻きぎみに越える。残置ピトン5本のうち2本に残置シュリング有り。別に難しくはないが、下の釜が深く、流れも速いので一応ザイルを出した(ただし、上部でのピレーポイントが適当なものがない)。10m幅広滝は水流右、10m。黒のスラブ滝は左手より取りつき水流左を直上するが、ホールドが細かいので注意が必要。赤茶けたナメが終わると長いゴーローが続き、稜線に出る。願頭部は傾斜も強く、快適なビバーク地はない。平ヶ岳で小休止の後、下山することにする。玉子石の方から中ノ岐林道にしっかりとした道がついており、それを利用(地図にはない)。中ノ岐林道をひたすら歩く。途中、夕食Part Iを作り食べる。林道から出て銀山湖岸を歩きながら、来たワゴン車をとめ、小出まで乗せてもらう。小出より電車に乗り仙ノ倉山荘に戻る。ものすごく疲れた。

P.S. 87年は雪が少なくまた、梅雨もあまり雨が降らず、奥利根湖は昭和53年以来の水不足でアプローチは楽だったが、例年ははげしいヤブコギがあるので時間的にはだいぶかかると思う。

水長沢尾根はヤブ尾根で、平ヶ岳から水長沢出合まで下降約4時間（部分的にかなり急な所もある）。水場は水長沢山の湧水があるが、盛夏はかれていることが多い。

利根本流の井戸沢付近に今年は雪がなかったとのこと（水長沢も皆無であった）。

など参考までに。

## 西 ゼ ン

日 程： 1987年 8月9日

メンバー： 豊島（OB）、藤井（OB）、平井。

山荘(9:30) —— 西ゼン出合(10:25) —— 第二スラブ上部(11:30) ——  
—— 稜線(12:00) —— 山荘(13:50)

少し寝過ごして遅くなったが、出発。えらい早いペースで、すぐに出合についてしまう。沢も快調なペースで第一スラブは水流左を登り滝を直登して、第二スラブも水流右を快適に登り小休止。水がかけれるところでビールを冷やし、あっというまに終わってしまう。稜線でビールを飲み、一休みして平標新道を下る。今度はゆっくり登ってみたい気がした。

## 東 ゼ ン

日 程： 1987年 8月12日

メンバー： 藤井（OB）、土佐、平井。

山荘(9:00) —— 出合(10:00) —— 稜線(12:30) ——  
—— イイ沢下降点(13:00) —— 山荘(14:30)

この前の西ゼンの時のようなハイペースで出合まで行く。天気が思わしくないので、すぐさま東ゼンに入る。ナメ滝を快適に行く。中ゼンのスラブもまたすごい。それを横に見ながら進む。あいかわらずペースが早い。大滝は水量も多かったので、ザイルを使用。藤井さんトップで行く。皆、全身ずぶぬれとなる。その後も快適に滝を登ってゆくと平凡なゴーローが続く。稜線に出て仙ノ倉北尾根を下る途中、やたらヘビが出現し、皆でこわがりながらイイ沢下降点にたどりつく。ササセードはササがぬれていて、今一つ気持ちよくなかった。山荘に戻ると糸井がハンモックで寝ていた。

## 湯檜曾川本谷

日 程： 1987年 8月30日

メンバー： 平井、糸井。

土合駅(5:20) —— 武能沢出合(6:20) ——

—— 抱き返り滝上部(7:20) —— 朝日岳(9:50着、10:40 発)——

—— 笠ヶ岳(11:15) —— 白毛門(11:50) —— 土合駅(13:15)

前回失敗に終わったので、リターンマッチで再び入谷。二人なので快調に飛ばす。魚止メ滝を越え、その上のゴルジュは高巻く(右岸踏み跡有り)。白樺沢出合付近で先行パーティーを抜く。十字峽手前のトコをこえた所でも先行パーティーがいるが同じルートに行くのはしゃくだったので、難しいガリーの方からトラバースする方に行き、こわい思いをする。その先行パーティーも抜き左へ折れて本谷へと行く。20m抱き返り滝はガイドブックどおりに右岸の凹角を登り、草付きをトラバースする。そこから滝、ナメ、釜が連続し、すべて直登をして、釜で泳いだりして楽しむ。大滝も左壁を登り、落ち口にトラバースする。大滝より上部はやや平凡となり、水が濁れる直前で赤布がありそこから右に入って踏み跡を忠実にたどると、朝日の頂上に出る。あとは稜線を下るだけだが、暑くて結構疲れた。特別悪いところもなく、なかなか楽しい沢だなといながら帰途についた。初心者がいてもザイルを使えば行けると思いました。

# 登川米子沢

日 程： 1987年 10月10日

メンバー： 系井、土佐、平井、新藤、藤井（OB）、豊島（OB）、  
他 医学部倉本、大塚、田村（芳）（OB）。

駐車場（7：30） —— 奥の二俣（10：30） —— 稜線（10：15～14：00） ——  
—— 駐車場（15：00）

高速を使い清水の駐車場へ。上の駐車場は満車で下に車を置いて出発。いつものごとく豊島さんが快調なペースで歩いていく。ナメ沢出合の少し下流でわらじをつけていると岩登りでもするかのごとく、全員（10人以上）でハーネスをつけカラビナをじゃらじゃらとさせているパーティーがいた。その中の1人に黒いタイツに短パンというかなりすごい格好の人がいて、吹き出してしまった。沢は紅葉していてきれいで、大変気持ちがいい。先行パーティーをどんどん抜いて、あっという間に奥の二俣についてしまう。ここでビールを1本あけ、巻機小屋へ。ここから少し登って、少し広いところで大休止。ビールを2本あけて昼寝をする。1時間位して、ヌクビ沢から上がってくるはずの堀内達がまだ来ないので、平井、系井で割引岳、牛ヶ岳へ散歩に出かけるがまだ来ない。しばらくして堀内隊到着。小休止の後、いつものごとくかっ飛んで下山。湯沢で温泉に入って帰る。

# 谷川ヒツゴー沢

日 程： 1987年 10月11日

メンバー： 系井、土佐、平井、藤井（OB）。

駐車場（7：30） —— 二俣（8：15） —— 稜線（11：20） —— 駐車場（13：20）

昨日に続いての沢登り。若干、疲れが残っている。朝はかなり冷えこんでおり車から出るのに勇気が必要であったが、天気は昨日にも増して良い。沢は、

最初からシャワークライミングでビショぬれになってしまった。滝は全部直登でき、紅葉もきれいで気持ちがいい。途中、糸井が釜にとび込んで遊んでいた。

この頃には気温も上がりそれほど寒くはなく、むしろ暑いくらいだった。早目に中ゴ-尾根に上がり下山。道はけっこう荒れている。例によって、温泉につかって帰る。

## 二子山（中央リッジルート）

日 程： 1987年 10月22日 晴

メンバー： 嘉村、土佐、糸井、平井、堀内、竹本、砂上。

車2台で前橋を出る。車を止め、登山道を登る。40分ほどで取り付きにつく。平井-竹本、糸井-土佐-堀内、砂上-嘉村でパーティーを組む。平井-竹本パーティーが最初に取りつく。その後より糸井のパーティーが続く。嘉村さんのパーティーは別のルートに登った。1P目はフェイスを右上。平井はルートを間違え左上して、2P目凹角を上がりやや右上してフェイスを左手よりまいて、ルートに戻る。3P目は核心部のクラックで、ピレイピンは豊富なので短い間隔でランニングを取る。中央バンドで小休止後、上部に取りつく。上部は下部に比べ容易で、あっというまに西岳の一峰に出る。嘉村さん達は、クラックからバンドに出た所より少し左に行った所を上がったようだが、なかなかおもしろかったらしい。全員頂上に立ったところで下山する。

## 松 木 ・ 黒 沢

日 程： 1988年 1月10日

メンバー： 豊島、平井。

黒沢出合より見ると氷が少ない。一応行ってみることにして、F1を登る。豊島さんが途中、ランニングを取ろうとするがハーケンが効かないようで、

そのまま上がってしまう。その上の滝を見に行くが、状態が悪そうなので、やめて下降する。夏小屋沢と横向沢を見にゆくが、登らずに帰ることにする。

## 吾 妻

日 程： 1987年 2月6日  
メンバー： 豊島（OB）、平井、阿部。

豊島さんが、東京で入っている会の人と一緒に吾妻へ向かう。白系の滝まで降りてゆくが氷はあまりなく、トップロープで何本か登って、帰りに尻焼き温泉に寄ってくる。温泉の露天風呂のところにもみごとな氷瀑があった。

## 松木・黒沢・夏小屋沢

日 程： 1987年 2月7日  
メンバー： 豊島（OB）、平井、土佐、阿部。

最初、黒沢のF1を登るがその上はまた状態が悪く、夏小屋沢に向かう。桐生山岳会の樋口氏達と合流し、樋口氏がリードした後を1本ずつ登る。今年は暖冬のせいか氷が少なく、状態もよくなかったため、あまり楽しめなかった。

# 尾 瀬

日 程： 1987年 2月27日～28日

メンバー： 赤塚、平井、堀内、豊島（OB）。

2月27日 曇

戸倉(8:10) —— 鳩待峠(10:45-12:00)⌘ —— 至仏山(14:30) ——  
—— ⌘(15:30)

桐生を出るのが遅くなり、歩き始めが遅くなってしまった。林道は最初、雪というより氷のような所を歩く。シールがいたみそうな感じがした。堀内はスキー歩行は初めてで何となくぎこちない。赤塚さんは卒研が終わったばかりでバテているようだが、豊島さんは快調に歩いてゆく。途中からは雪も粉雪になり、歩きやすい。津奈木橋で小休止後、鳩待峠まで一気に登る。鳩待でテントを張り至仏へ出発。赤塚さんは疲れ果てていてテントで寝ているので、3人である。悪沢より稜線づたいに至仏をめざす。雪はシールがよくきき、とても歩きやすい。稜線に出ると風が強くなる。小至仏はまかずにピークを通過。堀内は、少々こわがっている様である。至仏山頂は風が強く寒いので、シールを取りすぐに滑降開始する。豊島さんが気持ちよさそうに滑ってゆく。その後に私が続き、こけまくる。堀内は登りの疲れか、うまく滑れないようだ。鳩待奇りに向かって降り、鳩待へ登る。夜は内張りのないテントで風をもろに受けてたいへん寒いので、早々に寝る。粉雪の至仏は最高であった。

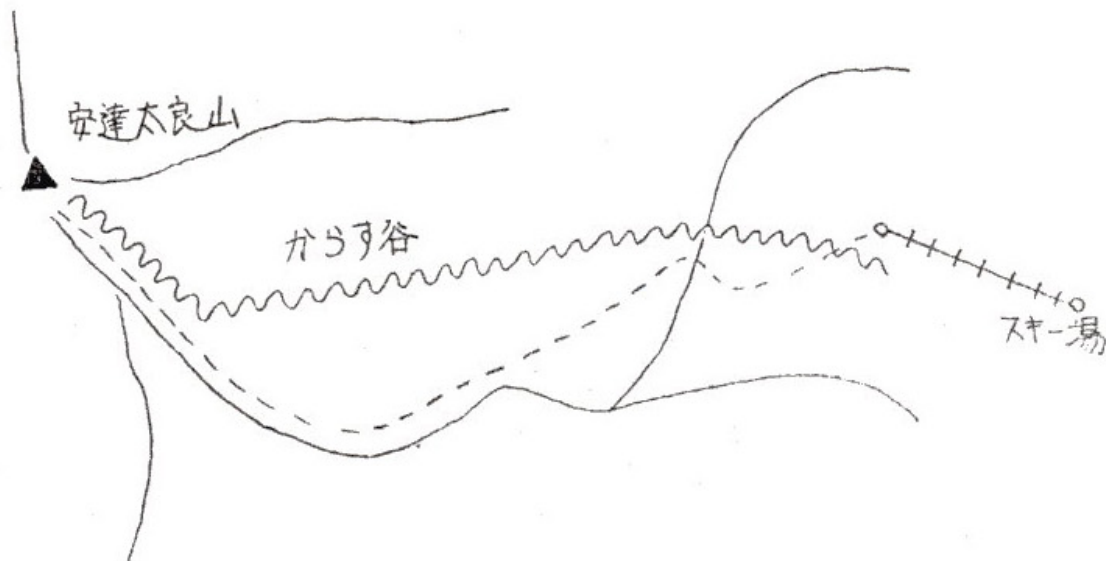
2月28日 曇

⌘鳩待峠(7:00) —— 富士見峠 —— 戸倉(13:10)

本日は荷鞍の方を回って戸倉のスキー場に出る予定で出発。アヤメ平方面を目指す。私は堀内について行く。豊島さんと赤塚さんははるか先に行ってしまう、堀内はかなりバテている様子であるが、先がどんどん行ってしまうのでなかなか休めない。アヤメ平手前で休む。アヤメ平付近は風が強く、雪面はクラストしており、シュカブラがきれいだった。富士見小屋手前で私のシールの調子が悪くなり、スキーをかついでツボ足で歩く。堀内がバテているのと、私のシールの調子が悪いことから、富士見峠より降りることになる。最初トラバースぎみに滑って、沢に入らないようにする。途中でシールをつけ、少し登り戸倉のスキー場に出る。

# 安達太良山 山スキー

日 程： 1988年2月28日  
メンバー： C. L. 原 和比古 (医2)  
S. L. 土 佐 融 児 (工3)  
お客様 齋 藤 繁 (医OB)



2月28日 晴れ

夜中の12時過ぎに桐生に土佐を迎えに行き、そのまま宇都宮の齋藤さんの下宿にいき、仮眠をとる。5時頃に宇都宮を出発、7時半に安達太良高原スキー場につく。準備をしてリフトの動くのを待ち、8時過ぎにリフトにのる。終点からスキーをつけ出発、いきなりカリカリに凍った急登が始まる。齋藤さんはスイスイ登るが、他の二人には難しすぎ、スキーを外して登るはめになる。

五葉松平まで30分程かかる。風が強く、気温も低い。時折、地吹雪が襲い視界が途切れそうになる。ここからはスキーを付け歩いて行くが、頂上付近では担いで運んだ。スキーを担ぐと、真っ直ぐ歩けない程、風がつよい。風の呼吸を読み、弱くなった隙をみて、数歩進む。これの繰り返しである。但し地形は判りやすく、なだらかなので転んでも大丈夫である。この頃からかなり視界が開けてくる。1時間半程でピーク直下に着き、スキーをデポして頂上を踏む。ここで風影を探して昼飯を食べる。下りはまず稜線沿いに少し滑り、下が確認出来たところで、からす谷に滑りこむ。下から登ってくる人達に見られながら、ウェーデルンをきめる。もう最高である。30分程でスキー場に戻り、そこで少し遊んだ。



## 西 黒 尾 根

日 程： 1988年 3月13日  
メンバー： 嘉村、平井、堀内、野口（OB）。

登山センター(7:00) —— トマの耳(11:00) ——  
オキの耳—トマの耳(12:15) —— 登山センター(13:30)

12、13日で日光・白根の予定であったが、12日の朝大雨の為中止となり、13日西黒尾根となる。出発が少し遅れてしまい、登山センターを7:00に出る。樹林の登りはグリセードした跡が氷化しており、アイゼンがほしいようだった。ラクダの背の1つ目のこぶは、雪庇はそれほど大きくなく尾根をそのまま進む。2つ目からは雪庇も大きく出ており、注意しながら尾根を進む。雪は足首程度。出発が遅かったのに先頭である。ガレ沢のコルからは、雪壁を直上する。ザンゲ岩のあたりで後続の人が追いついてきて、ラッセルをかわってもらう。肩の広場につくとガスがきれて視界がよくなり、頂上では360°の大展望となる。オキの耳まで行き、ゆっくり展望を楽しんでから下山。下りは雪がくさっておりアイゼンに雪がつくので、はずして下る。天気がよく、非常に気持ちのよい山行だった。

## 西ゼン・山スキー

日 程： 1988年3月20日  
メンバー： 高橋（教OB），豊島（IOB），土佐（I4）

仙ノ倉山荘(7:35) —— 樺立尾根取り付き(8:30) —— 日白稜線合流(10:00)  
—— 平標肩(11:30) —— 平標頂上着(12:20) —— 頂上発(12:20) ——  
—— 西ゼン滑降 —— 山荘着(13:30)

連休とあって山荘は前日からぎわっていて、我々のほかに山岳OBの方が4人来ていた。今日は平標沢を滑るということで、早々に山荘を出ていった。

我々はそれより少し遅れて出発する。仙ノ倉谷徒渉点までは所々、水流が見えている。平標沢の方へ入ってしばらくして、適当な尾根に取り付く。この尾根はかなり急で、スキーをはいているとなかなか進まないし、かといってツボ足では雪がモナカ状なので歩きづらく、苦勞した。日白の稜線に出てから、山岳部の人達に追いついた。稜線を登るにつれ視界が悪くなり、風も強く、平標の肩あたりからは、かなり風が強くなる。頂上では寒くてゆっくり休む気になれず、すぐにスキーをはいて滑り始める。ここで、山岳部OBの相川さんが、話のタネにと、一緒に滑ることになる。視界は悪く、前を滑っている人の姿がガスの切れ目で、チラッと見えるぐらいである。2スラあたりから視界はいくらか良くなり、締まった雪の上に粉雪がのっけていて、快適に滑れる。2スラ下部の滝は埋まっているが、かなりの急斜面で斜滑降とキックターンで降りる。

このあたりは、雪がモコモコ動くので少々不安になる。1スラの斜面も雪質が良く、快適に滑って、山荘に帰る。

## シッケイ沢・山スキー

日 程： 1988年8月6日

メンバー： 高橋（教OB），豊島（IOB），藤井（IOB），  
土佐（IOB）

仙ノ倉山荘(7:30) —— シッケイ沢出合(8:30) ——

—— シッケイ沢左俣1710m付近(10:45) —— 山荘(12:10)

今日は、昨日のメンバーに藤井さんが加わり、シッケイ沢へ向う。いつも元気な高橋さんは、昨晚飲み過ぎて不調である。山荘の前の吊り橋から毛渡沢に入ればは、樹林帯が続く。しかし、すぐに谷が狭くなって、木がなくなり、歩きやすくなる。沢をつめるにしたがい、クラスト気味になり、ガスが濃くなり、風も強くなってきたので、途中で引き返すことにする。滑降し始めてしばらくは、雪がクラスト気味なので滑りづらいが、あとは快適に下まで滑ることができた。谷が広くなると多少登りもあり、また、木もかなりたくさん

生えているので、よけるのが大変である。山荘で一息入れ、掃除をしてから、林道をスキーをつけて土樽に下りる。今度は、仙ノ倉山頂から滑りたいものだ。

## 南 八 ヶ 岳

日 程： 1988年 4月2日～4月3日

メンバー： 嘉村、平井。

4月2日 阿弥陀北稜

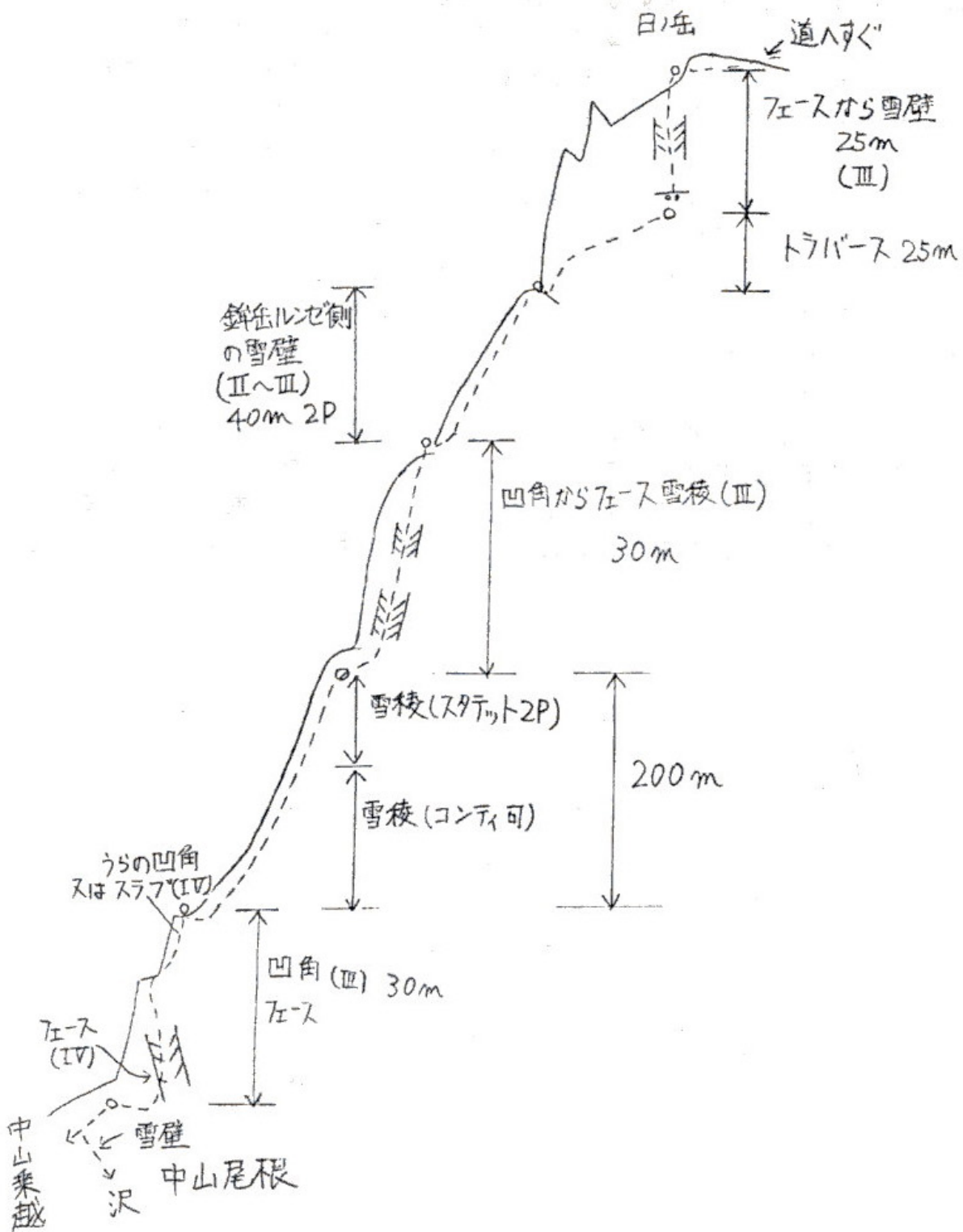
美濃戸口(4:45) —— 小松山荘(5:40- 5:50) ——

赤岳鉱泉(7:10- 7:40) —— 石尊稜取り付き(8:40- 9:00) ——

—— 行者小屋(9:20-10:30) —— 北稜下部(11:00) ——

—— 岩峰取り付き(11:40) —— 阿弥陀岳頂上(13:00-13:10) ——

—— 行者小屋(13:40)

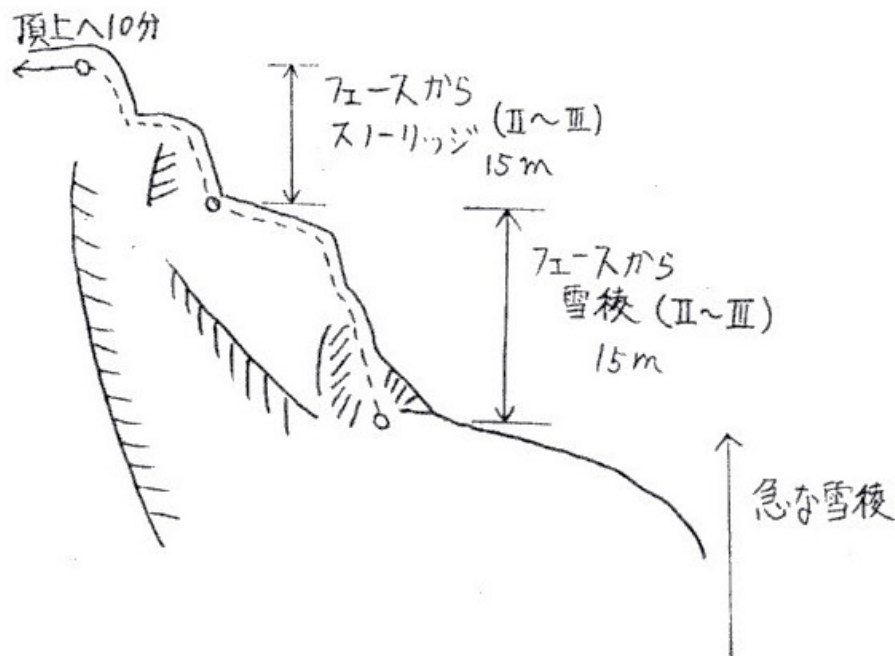


薄暗いうちに出発。林道は凍結している。赤岳鉱泉へはトレースが入っている。

天気はあまりはっきりとせずガスがかかっているが、とりあえず石尊稜に行くことにして赤岳鉱泉を出る。最初は中山乗越への道をたどり、途中より乗越の方へ登らず沢沿いに行く。先行者があるらしくトレースがある。石尊稜へは銚岳ルンゼ側より取り付く。銚岳ルンゼの下部には、小さなデブリが出ている。

天気も悪く体調もすぐれない為、取り付くのをやめ、行者小屋へ行く。小休止後、短い阿弥陀北稜に行くことになる。ガスがかかっており視界が悪い。中岳のコルへの夏道をたどり、北稜に出る。トレースは雪で埋もれており、ひざ下程度のラッセルである。北稜に出た時は、周囲に何も見えなかった。ここより木のはえた雪稜に行く。傾斜が徐々に増す。岩峰基部でアンザイレンするが、もう少し手前より一応していった方がよいと思われる。最初のピッチは、フェイスを右上し雪稜に入る。ランニングは岩角などに取れる。残置ピンも2つ有り、2ピッチ目は、フェイスを直上し雪稜に入るが両側、特に北壁側が切れている。ここから頂上まではコイティで行くが、すぐに一般路のトレースに出る。

頂上は視界も悪く風もあるので、小休止の後、下山する。あっという間に行者小屋に着いてしまう。このルートは、黒岩の中央稜で練習すれば充分登れると思う。



4月3日 中山尾根

行者小屋(6:45) —— 取り付き(7:30-8:00) —— 日ノ岳(13:00) ——  
—— 行者小屋(13:40-14:40) —— 小松山荘(15:30-15:50) ——  
—— 美濃戸口(16:15)

朝からよい天気である。6時に桐生山岳会の人と合流するわけであったが、7時前になっても来ないので先に出る。中山乗越手前の沢より途中、樹林がまばらになった所より尾根上に出るが、尾根上に中山乗越よりのトレースが入っている。すでに1パーティーが先行しており、取り付きにも別のパーティーがいたが、我々が先に取り付かせてもらう。1ピッチ目は、正面やや右より左上。

やや立っていて、何となくいやな感じだが強引に上がってしまう。私はここより、やや右側がかぶりぎみのところの左を越すところがいやだった。そこを越すとテラスに出て、真上の凹角に残置支点があるので行ってみるが、出口がホールドが細く悪いのでその左下を回り込むように上る。ここはスラブでホールドが細いが、傾斜が落ちているので何とか越す。木でピレイをとる。ランニングは下部に残置ピンがあり、あとは木の根などに取る。このピッチは、もっと右側の凹角から取り付いた方が楽である。その後は雪稜となり、コンティで行く。傾斜が強くなった所で再びスタカットで行く。ランニングは木から取れる。上部岩壁は正面の2段になっている凹角を登る。下段は容易で残置ピン2本、上段は残置ピトンが左手にある。立っているが高さは2m強で右側にホールドが多数あるので、強引に越せる。ここを抜けると、傾斜の落ちた雪稜が20m位続く。このピッチは、右にトラバースして上るルートもあるようである。雪稜の後には、鋒岳ルンゼ側の雪壁が2ピッチほどある。1ピッチ目は容易で、2ピッチ目は稜上のテラス目指して登る。ここからは、右側より稜上に行くルートと左側より回り込んで雪面を上り稜上に出るルートがあり、右側のルートは下が切れ落ちている。我々は右側のルートに行く。稜上は両側がスッパリと切れ落ちており、馬乗りになって確保する。これより稜上は鶏冠状のナイフリッジとなり、忠実につめるのは悪そうなので先行パーティーも時間がかかっている。我々はリッジ右手のバンドをトラバース(残置ピン2本)し、滝下部に行き2mほどの滝を強引に越し、雪面を上り日ノ岳に出る。全体的に岩はしっかりしており適当なリスも有るが、残置ピンは少ないのでピトンを多めに持って行った方がよいと思う。下降は地藏尾根より行者小屋に降り、ツェルトを撤収し下山する。

# 白馬大雪溪

日 程： 1988年5月22日

メンバー： 浅見（I4）、平井（I4）、糸井（I4）、堀内（I3）、  
神保（I2）、豊島（IOB）、函所（医短OG）

前日の夜前橋を出発し、22日朝、現地で豊島さんと合流する。天気はくもっていてあまりよくない。大雪溪を登りはじめて1ピッチとるころ、小雨が始まりこれ以上登ることをあきらめる。しかし、この時点で相変わらずペースの速い豊島さんと平井さんは、すでに見えなくなっている。このため糸井さんと神保の二人で追いかけて、他の人はその場で待つことになる。追いかけた二人は結局追いつくことができず、稜線まで登り滑ってきた平井さん、豊島さんを見つけ4人でみんなの所まで滑る。全員で滑りはじめてから平井さんが転倒のため足首を痛めたが、なんとか自力で車までもどることができた。天気も悪く雪の状態もあまり良くなく、楽しいスキーができなかったのが残念だった。

# 仙ノ倉谷 西ゼン

日 程： 1988年 8月27日 曇り

メンバー： 豊島（IOB）、平井（I4）、堀内（I3）、加藤（I2）。

仙ノ倉山荘(7:40) —— 東西ゼン出合(8:40) —— 稜線(11:30) ——  
—— 山荘(13:30)

山荘を出発してから1時間で東西ゼン出合へ。左には東ゼンの大滝が見える。私（加藤）は初めての本格的な沢なので、期待と不安と緊張の中いざ溯行開始。始めのスラブは水流の右側を登る。少し行くと第1スラブである。その上には、第2スラブが目の前に広がっている。感動的である。両スラブとも、水流の左側をスリップしないよう注意して登る。第2スラブを通過するともう沢は次第に細くなり、途中で小休止する。出合からここまで1時間ほどで登ってしまったのだ。あっという間であった。天気はあいにく曇りであったが、沢の醍醐味は充分堪能できた。ヤブこぎもたいしたことはないだろうと、途中、本

来のコースとは別の枝沢に入る。しかし、ヤブこぎをし始めたがなかなか稜線に出ない。4人とも別々にヤブをこぐが、豊島さんと平井さんは30分程度でヤブを抜けるが、私と堀内さんはルートファインディングを誤り、1時間以上もかかってしまった。稜線に出てからは、途中、西ゼンの広大なスラブを見ながら平標新道を下る。大変有意義な山行でした。

## 一ノ倉沢 南稜

日程： 1988年8月6日  
メンバー： 平井（4L）、豊島（OB）

一ノ倉沢出合(8:00) —— 南稜テラス(10:00) —— 終了(11:50) ——  
—— 一ノ倉岳(13:00) —— 一ノ倉沢出合(15:30)

5日の夜、土合で豊島さんと合流する。外は、雨が降っていた。あけがた近くになっても上がらず、これはだめかなと思っていたが7時過ぎに起きたら雨も上がっていたのでとりあえず行ってみることにした。変形チムニーの予定であったが午後からは夕立もありそうで、出発が遅くなった事もあり南稜を登ることにした。アプローチでテールリッジ手前の雪渓にのる所で時間をくった。

後は、特に問題となる所もなく南稜テラスに着く。先行パーティーもなく少し休んで取り付く。雨上がりではあるが岩も最後のフェース以外は乾いており、快調に登る。南稜は特別難しい所もなく快適である。ルートの詳細はいろいろな本に出ているのでそちらの方を見てもらうことにする。最後のフェースの上部は濡れていて滑りやすそうだったので、ピトンを使い放題のAOで登った。

終了点より国境稜線を目指して登る。烏帽子岩手前のルンゼが濡れており、少々嫌な感じがした。一ノ倉岳で昼食をとり、西黒尾根を下る。車に入ったとたんに夕立がきた。あぶないところだった。



# 槍ヶ岳～穂高岳

日 程： 1988年 8月9日～8月13日

メンバー： 加藤義広 (工2).

本来、私は工学部の夏合宿と教育学部の夏合宿の両方に行く予定であったが、先の工学部の合宿中に風邪をひいてしまい、下山してからも治らず、その後の教育隊のほうに行けなくなってしまったが、しばらくして風邪が直ったので順調にいけば先に行っている教育隊に合流し、会えなければそのまま単独行するつもりでパーワンという形で、教育隊の夏合宿の後半のコースのこの槍～穂高のコースを計画した。私の病気のため、関係者の方々に多大なる迷惑をかけたことを深くお詫びします。

8月9日 晴れ

桐生(5:57) ■■(10:29) 松本駅(11:00) —— (11:30) 新島々(11:35) ==  
== (12:50) 上高地(13:00) —— (14:10) 徳沢園(14:25) ——  
—— (15:10) 横尾山荘♠1

電車、バスを乗り継いで上高地へ。さすがに観光客が多い。上高地から横尾山荘までは平坦な道で、2ピッチで行く。横尾山荘でツェルトを張るが、単独行は初めてなのでどこか心もとない。何もやることがないので早めに夕食を取り、すぐ寝てしまった。

8月10日 曇り→霧雨→霧

♠(5:00) —— (6:20) 槍沢ロッジ(6:40) —— 坊主岩小屋(9:30) —  
—— (10:05) 殺生ヒュッテ(10:20) —— (11:10) 槍岳山荘♠2

3:30起床。起きてみると、外は霧雨になっている。出発時には曇りになっていたが、やはり天候は良くない。横尾山荘から2ピッチで槍沢ロッジへ。このころより雨がばらつき出す。そこから1時間ほど行くと、槍沢の登りとなる。

病み上がりのせいか、足どりが重い。ローペースで一步一步、槍沢を登る。

雨とガスで槍の姿は見えない。殺生ヒュッテ辺りからは、主稜線に近づくにつれ風も出てきた。予定だと教育隊は8月1日に白馬から入山して、今日、槍岳山荘で幕営のはずだがはたして会えるだろうかと思いつつ、ついに槍岳山荘に着く。テン場に着くと、果たして彼らはそこにいたのである。7:00頃着いたらしく、昼寝をしていた。私が来たことと、ちょうど雨も止んだので、槍ヶ岳へピストン。往復40分位である。頂上で視界が悪いのが残念である。ジャン

ボ（8人用）を張るには、少し小さいテン場であった。水は、確か1ℓ 100円だと思ったが定かでない。10日ぶりの仲間との再会に喜びつつ夜はふける。以下、行動は全て教育隊と一緒にである。

8月11日 霧雨→霧→晴れ

♣2(5:00) —— 南岳(7:15) —— (7:30) 南岳避難小屋(8:00) ——  
—— 大キレット —— (11:20) 北穂高小屋♣3

朝、外は霧雨である。少し肌寒い。今日は大キレット通過だが、1年生がいるので岩が濡れているのが気がかりだけれども、とりあえず南岳避難小屋へ。

小屋に着いても相変わらずガスられている。小屋の人にも様子を聞いて結局行動を決意、出発する。小屋を過ぎて少し行くと、2カ所ほど10m程度のはしごがあり下る。黒岩等の岩登りを経験している上級生なら特に問題はないと思う大キレットだが、一応岩登りのトレーニング山行を2~3回経験していてもやはり1年生が心配である。が、途中の鎖場、岩場を無事通過、ほっとしながら北穂高小屋につく。天気は悪かったが風は穏やかで、また高度感もなく、途中数名の人と1羽の雷鳥に会うだけで比較的サクッと行ってしまった。北穂高小屋に着くとガスがとれて日が差す。南側は景色が見られるが、北側はガスで槍や大キレットの姿は見えない。テン場は、小屋から涸沢に下る分岐を5分くらい涸沢に下った所にある。小屋からは15分位かかる。ジャンボを張るには、少し狭いテン場である。水は雪渓を利用する。

8月12日 霧雨→晴れ

♣3(4:30) —— (6:20) 涸沢岳(6:40) —— (7:00) 穂高岳山荘(7:15)  
—— (7:55) 奥穂高岳(8:05) —— (9:00) 紀美子平(9:40) ——  
—— (9:55) 前穂高岳(10:30) —— (10:45) 紀美子平(11:00) ——  
—— (12:25) 岳沢ヒュッテ(12:45) —— (14:20) 小梨平キャンプ場♣4

出発してすぐにガスに包まれる。涸沢岳までは意外と渋い岩場だと思う。涸沢岳を下って穂高岳山荘に、そして奥穂高岳に。奥穂のピークまでは、残念ながら視界不良。せっかく北アルプスに来たのに、3日も天候不順で残念である。

続く紀美子平で昼食を取り、前穂高岳へピストン。このころより天気も良くなり、前穂のピークでは雲が多いものの視界も開け、遠く槍の姿を見ることができた。前穂から小梨平キャンプ場まで、あとは下るだけである。上高地に着くと、再び観光客の多さを再認識。河童橋で写真を撮ったが、浮いていた。この日の夜は、差し入れの花火で最後の一夜を過ごした。

8月13日 晴れ

♣4(9:00) == (10:00) 中ノ湯(11:00) == (12:00) 松本駅(12:58) ■■■  
■■■(17:24) 前橋駅

朝日を浴びる穂高がきれいだった。おみやげを買い、例の中ノ湯へ向かう。  
道行く車の人々に、我々は裸でパフォーマンスした。上高地から松本駅までは、マイクロ（10人乗）1台2万円だと思った。あとは電車で、教育隊にとっては2週間ぶりの群馬へと帰るのであった。

## 谷川馬蹄

日程： 1988年9月22日～9月24日  
メンバー： 糸井

9月22日

前橋 — 土合

前橋を21:00すぎに出発し、昭和の部室で足りないものを借り、買い出しをすませ出発。23:00ごろ土合着。この時間ではまだ駅は混んでない。

いすをキープし、寝る。夜中、谷川列車で来た人間がぞろぞろやってきてうるさい。

9月23日

土合 — 白毛門 — 笠ヶ岳 — 朝日岳♬1

5:00ごろ起床。6:00土合発。いきなり小雨が降っている。白毛門の登りはおそろしくつらかった。15分歩き5分休むのくり返して、9:00やっとピークにつく。白毛門から笠ヶ岳までは、道をまわりから笹がおおい、道が見えず、また、田んぼ状になっていて、靴の中がぐちゃぐちゃになった。相変わらずガスがかかり、風は強く、時々小雨が混じる。笠ヶ岳の登りの途中にツェルトを張るのにちょうどよさそうな所があるが、どうにか朝日まではがんばることに決める。10:00笠ヶ岳。11:30朝日岳。時間は早いですが、ツェルトを張ってしまう。荷物を軽くしようと、ビール1リットルとワンカップを飲む。ラジオでオリンピック女子バレー、日本—東ドイツ戦をやっていたが、ねてしまった。

9月24日

♬1朝日岳 — 清水峠 — 七ツ小屋岳 — 蓬峠 — 土樽

4:00ころ起き出す。外は雨。朝めしを食い、しばらくねる。5:15、

そろそろ出発しようとして外をのぞくと、雨は降っているが、見通しはよい。5：45発。J・Pで蓬方面がかすかに見える。これならば谷川まで行けるかもしれないと思うが、20分も下ると清水峠にガスがかかりはじめる。清水峠手前の池塘で道のまん中の水たまりの中を歩いていると、突然ジャボン。左足がひざ上までもぐってしまう。ここは要注意である。7：00清水峠。七ツ小屋の登りは体がなれてきたので、気合いを入れ、7：50着。ここで少しパンを食い、出発。また下りである。楽だ。8：30蓬峠。茂倉を登る元気はないので土樽に下る。この道ははじめて使う。斜面をトラバース気味に進むので、なかなか下らない。東保沢を過ぎてからは沢沿いに進む。ここで右の上ののったら、すべって、左足の太ももを思いっきり打った。ここから土樽まではびっこをひいて歩いた。11：00土樽駅に着き、12：30ごろの電車で土合に帰ってきた。

# O B 住 所 録

氏 名	卒業年・科	勤務先・住所	電 話
宇田川 絃	40E	(財) 関東電気保安協会 〒376 桐生市相生町5-707-9	02775-3-9515
岩 下 佳 司	41W	日清紡織 〒350 川越市東田町4-11	
新 井 靖 衛	41C	東洋パルプ(株) 不 明	
浅 海 琢 二	41S	不 明 不 明	
鳥 居 寛治郎	41M	千野製作所(株) 〒370-33 群馬郡榛名町下室田甲942-2	02737-4-1249 02734-4-1404
見 供 滋 忠	41M	三菱油化エンジニアリング(株) 〒222 横浜市港北区大豆戸町 834-2 大倉山ハイム6-604	045-541-0148
鳩 原 恵 二	41E	(株)くろがね工作所 〒330 大宮市三橋市3-142-15	0486-45-4438
藤 村 孝 道	42S	モーリン化学(株) 〒329-42 足利市駒場町770	0284-91-1747
内 田 邦 夫	42M	神戸製鋼所(株) 〒673 明石市沢野1丁目17-13	078-927-1207
田 沼 正 也	42M	(株)バブコック日立 〒231 横浜市中区間門町2-299 バブコック日立 間門社宅11号	045-623-1087

朝倉正博	42E	㈱クラブ 〒432 静岡県浜松市佐鳴台2-20-10 エンゼルハイツ 201	0534-49-1905
大塚光守	42E	東芝電気器具㈱前橋工場 〒371 前橋市古市町 東芝電気器具寮	
鹿山公	42S	興国化学工業㈱ 〒373 太田市龍舞町2070	
小林弘一	42C	明成商会㈱東京営業所 〒362 埼玉県上尾市錦町 2の12	0487-75-5030
深沢鼎	42教	太田女子高校 〒371-02 勢多郡粕川村前皆戸14	0272-85-3660
川田祐一	43W	塚田産業㈱ 〒326 足利市元学町823	
小島昭	43S	群馬工業高等専門学校工業化学科 〒376 桐生市本町4丁目338	0277-22-7055
横尾国夫	43M	横尾製作所㈱ 〒322-03 鹿沼市西沢町388	0289-77-2264
金子岩男	43K	日東製粉㈱ 〒340 草加市栄町松原団地B-46-7	
五十嵐信之	43K	東洋インキ製造㈱ 〒336 浦和市南浦和公園住宅42-501	
久保田耕司	43K	東芝セラミック㈱ 不明	
藤井幸吉	43M	ソニー㈱ 〒259-11 伊勢原市高森5-5-302	0463-94-6998
斎藤議	44S	群馬県土木部下水道課 〒371 前橋市岩神町3-4-9	0272-34-3054

原 文 雄	44K	日本酸素株式会社 〒367 本庄市北堀1479 (USAニュージャージー)	0495-22-6818
江 黒 茂	44M	東武鉄道株式会社 〒360 熊谷市本石1丁目300	0485-22-1847
横 山 崇 雄	44C	倉敷紡績株式会社 〒662 西宮市両度町3-3-403	
小 沢 達 樹	44W	群馬県工業試験所 〒371 前橋市小相木町488-1	0272-51-6524
松 田 衛 次	45L	東京三洋電気K.K 自動販売機(事) 〒373 太田市内ヶ島1574	0276-45-5299
草 場 彰	45院E	日立製作所株式会社戸塚工場 〒244 横浜市戸塚区戸塚1013-5	045-861-4764
中 島 好 司	45S	日本楽器株式会社 不 明	
加 藤 芳 彦	45W	不 明	
山 田 定 男	45M	古河アルミニウム株式会社日光工場 不 明	
上 山 悟	45K	大気社株式会社 〒156 東京都世田谷区経堂3-25-23	03-426-2789
埋 橋 文 人	45M	日立製作所株式会社 不 明	
根 岸 秀 幸	45M	ソニー株式会社 〒135 東京都江東区東陽4-12-20-1213	03-646-4108
須 藤 誠	45E	富士通株式会社 不 明	

中島恒弥	45E	三菱電気(株) 不明	
木村隆男	45院C	電々公社 不明	
岡部宣男	45S	足利学園高等学校 〒326-01 足利市板倉町800-4	0284-63-1164
斎藤勝男	45M	群馬大学工学部機械工学科 〒376 桐生市相生町5-102-19	0284-52-0437
滝野哲司	46C	沖電気(株)本社工場 〒370-31 群馬県箕郷町生原1745-1	0273-74-2043
高橋撤夫	46D	クラレ(株) 〒793 愛媛県西条市神拝乙130 クラレ局社宅16号	08975-5-4896
堀江英雄	46L	コペル電子(株)足利工場 〒326-02 足利市月谷町1275-13	0284-41-0502
宮川英雄	46W	不明 〒280 千葉市高洲2-5-9-302	0472-44-8335
大橋進	46W	不明	
鳥居寿一	46P	出光興産(株) 〒246 横浜市瀬谷区阿久和田3662	
河野政美	46P	昭和ゴム(株) 〒277 柏市酒井根551-54	0471-75-0989
五十嵐和男	46W	トヨタ自動車工業(株) 〒441-63 愛知県宝飯郡御津町赤根水神11-1	
吉野栄	46C	出光興産(株) 不明	



浅見 武 義	46L	日本ビクター(株) 不 明	
太 田 博	47L	タケダ理研工業(株)大阪営業所 〒663 兵庫県西宮市高須町1-1-6-320	0798-46-1350
斎 藤 功	47M	大和設備工事(株) 〒375 藤岡市東平井1265-3	02742-3-5794
広 田 雅 司	47院W	帝人(株) 〒565 大阪府吹田市山田東4-18 千里山田コーポラス B 504号	06-876-2104
鎌 田 篤 夫	48M	足利工業大学附属高校 〒372-01 佐野市出流原町991	0283-25-0290
山 口 昌 男	48M	日立機電工業(株) 〒373 太田市矢場2961	0276-45-6327
尾 高 秀 一	48E	三菱電気(株)群馬製作所 〒373 太田市熊野町25-10 三菱電気桃ヶ丘社宅	0276-25-6173
海老原 孝 司	48E	近畿電気工事(株) 〒281 千葉市稲毛東6-10-2-803	0472-47-1713
長 谷 健 二	48E	フジマル工業(株) 〒228 座間市入谷2丁目135-24	
川 崎 喜 孝	49M	五洋建設(株) 〒175 東京都板橋区高島平1-72-20 コーポ寿なが 301	03-550-0293
品 田 忠 保	49K	三井三池製作所(株) 〒328-03 栃木県田村町1080 三井田村寮3-13	0282-27-4976
海老沼 義 郎	49K	大気社(株) 〒330 大宮市大和田町2-511	0486-86-1283
熊 田 武 夫	49K	クノール食品(株)長野出張所 不 明	

山口 明	49K	興国化学工業株 〒326 足利市本城2丁目1789	0284-41-7963
柴野 真知子 (旧姓 加藤)	50C	不明 〒373 太田市新井町574-14	
大前 寛美	50S	不明 〒079-13 北海道芦別市上芦別542 の2	01242-2-4173
渡辺 等	50M	不明 〒377 群馬県渋川市	0279-24-5825 (呼)
高橋 茂雄	50M	高崎製糸株 不明	
小林 茂	50M	日産自動車株 〒228 神奈川県座間市四ツ谷318-1	0462-56-0239
大島 茂雄	50M	NTT 〒370 高崎市貝沢町730-1	
須永 守	51M	サンデン株 〒373-01 太田市大字成塚677-1	0276-37-1525
網川 猛	51P	関東サーモ株 〒376 桐生市新宿通り1丁目432	0277-44-9042
武井 昇	51院W	職業訓練大学校 〒229 相模原市西橋本1-14-32 訓練大橋本宿舎1-15	0427-71-6988
島田 文夫	52E	日本電機株 〒223 横浜市港北区日吉本町899 SKビル203号	044-62-7414
池上 栄	52E	太陽電機株 〒371 前橋市川原町208	0272-21-8506
小井田 広 (旧姓 生出)	52J	三栄測器株宇都宮製作所 〒321-33 栃木県芳賀郡芳賀町東水沼362	0286-53-1151 02867-7-3018

浦野克美 (旧姓 桜井)	52C	日本抗体研究所(株) 〒379-01 安中市東上磯部1651	0273-85-4361
網川法子	52P	栃木精工(株) 〒376 桐生市新宿1-12-21	0277-44-9042
大塩茂夫	52P	長岡技術化学大学 〒949-54 新潟県三島郡越路町来迎寺甲1641-2	0258-92-2863
河内秀夫	52C	かわち文具(株) 〒376 桐生市本町5-62	0277-47-2246
馬坂達男	52院P	太陽誘電(株) 〒370-33 群馬郡榛名町下室田800-3 太陽荘	02737-4-0214
小林一郎	53L	日本メディコ(株) 不 明	
吉野博文	53L	リコー(株) 〒142 東京都品川区大崎4-5-16	
陳 親 博	53院L	〒326 足利市栄町1丁目3360 昭和58年11月ダウラギリ1峰にて逝去	
永島孝作	53院P	四国製紙(株)三島工場 〒799-04 愛媛県伊予三島市朝日3-4-30 レジデンス武村 303	0896-24-2169
木村博志	54W	平岡織染(株) 〒340 草加市弁天町435-2	0489-31-5879
真鍋忠男	54C	〒969-62 福島県大沼郡会津高田町大字杉屋字村廻	
滝 裕 徳	54S	東海アセチレン(株) 愛知県豊橋市忠興1-1-6 コーポ白鳥204号	0532-63-0966
喜古寿一	55W	市田KK 〒120 東京都足立区綾瀬2-8-1	03-602-0037

大橋 忠	55C	泰栄商工 〒311-02 茨城県那珂郡那珂町向山1279-67	02929-8-5746
土山 龍司	55M	不明 不明	
新里 均	55E	沖縄エアースervice(株) 〒904 沖縄県沖縄市字山内672 番地	09893-3-0877
野上 達哉	56院C	日産化学工業中央研究所 〒274 千葉県船橋市習志野1-5-17-406	0474-68-0714
江川 幸和	56S	藤本製菓 〒583 大阪府南河内郡太子町春日84-4 三英ハイツC-201	0721-98-4086
橋本 勇	56L	ビクター(株) 〒426 静岡県藤枝市茶町4丁目 茶町ハイツ201号	0546-44-4076
村田 進	56M	(株)富士電機総合研究所 〒193 八王子散田町3-6-19第10芙蓉寮	0426-63-0575
太田 稔	56J	凸版印刷(株) 〒136 東京都江東区東砂1-6-15	03-645-1332
井上 祐治	56M	日本電装(株) 〒474 愛知県大府市横根町名高1-5 日本電装第1大府寮1033号	0562-47-1191
根岸 和美	56L	日本電子機器(株) 〒372 伊勢崎市稻荷町469-2	0270-24-2255
関口 満雄	56M	花王石鹸 不明	
古川 孝司	56W	オンワード樫山(株) 不明	

本 多 偉知朗	57院P	杉村特許事務所 〒176 東京都練馬区氷川台4-49-4-303	
浅 香 多喜夫	57K	コロンビア・マグネプロダクツ 〒321-43 栃木県真岡市台町2753 新明寮	02858-2-1211 (呼)
増 田 光 男	57M	古河電工 〒254 神奈川県平塚市董平16-10 古河電工董平寮	0463-34-4465
佐 藤 正 幸	57E	不 明 不 明	
北 川 昌 基	58M	イスズ自動車 〒244 神奈川県横浜市戸塚区平戸 イスズ戸塚南寮B-108	045-823-2990
中 村 雅 秋	58P	東洋紡績機総合研究所 〒520-02 滋賀県大津市美空町1-3 琵琶湖美空第2団地2号棟301号	0775-73-5177 (呼)
飯 島 宏 幸	58W	三菱自工岡崎 〒444 愛知県岡崎市小針町字北畑8-1 三菱自工岡崎第一菱風寮A541号	0564-31-4945 (呼)
井ノ瀬 純	58C	富士フィルム 〒250-01 神奈川県南足柄市狩野934 富士フィルム第7アパートA-311 自宅〒370-35 群馬郡群馬町金古1182-3	0465-74-1727 0273-73-0869
黒 沢 浩	58S	〒366-01 埼玉県深谷市矢島762	0485-71-0764
斎 藤 究	58M	東芝精機 〒242 神奈川県大和市中央5-8-23 東芝精機青雲寮	0462-64-3488
山 田 靖	58M	日揮機 〒222 神奈川県横浜市港北区太尾町875 日揮大倉山寮	045-543-2875

太田直宏	58K	中部ガス浜松営業所 〒430 静岡県浜松市中沢町34-2	0534-65-1234 0534-71-0055
星野和弘	58W	東村役場 〒376-03 勢多郡東村大字小夜戸491	0277-97-3507
大東浩司	58S	立石電機㈱ 〒523 滋賀県近江八幡市野村町748	0748-36-6159
若田部純一	58A	群馬県庁 〒371 桐生市東町二丁目3-36	
増子隆	58M	日立工機 〒311-42 茨城県水戸市岩根町990	0292-29-7271
芦沢微之	59C	不明 〒376 埼玉県本庄市銀座3-6-3	0495-21-8550
水上徹	59S	パイロット・プレシジョン 〒254 平塚市四ノ宮542 清風荘1F西舎川 自宅〒177 東京都練馬区石神井町7-6-11	0463-54-4370 03-904-5532
堀尾直史	60S	スタンレー電気㈱ 〒227 横浜市緑区荏田南2-17-8 志村マンション 502号 自宅〒446 愛知県安城市大岡町前畑22-1	045-941-7629 0566-76-8343
田村博之	60M	日本ラジエーター 〒326 栃木県足利市助戸東山町1714	0284-42-1868
清水浩彰	60A	静岡県庁 〒436-04 静岡県小笠郡大東町中方1717	05377-4-3425
小潟利己	60院C	三井東圧化学 〒297 千葉県茂原市六野2785-1 六野寮 自宅〒370-01 佐波郡境町保泉277-4	0475-22-2282 0270-74-3300

木津和久	61院S	イビ電気 〒503 岐阜県大垣市青柳町 自宅〒462 名古屋市北区辻本通2-18	0584-91-6346 052-912-6304
豊島吉章	61L	東京重機 東京都世田谷区上祖師谷1-17-27 自宅〒794 愛媛県今治市通町1丁目5-6	0898-22-3321
飯塚宣男	61J	カシオ計算機(株) 〒190-11 東京都西多摩郡羽村町栄町2-14-2 カシオ計算機(株)羽村寮 306号室 自宅〒370-04 新田郡尾島町前小屋1818-1	0425-55-6987 02765-2-2607
高橋好幸	61A	株本間組 本間組社員寮 自宅〒946-02 新潟県北魚沼郡守門村大字大倉1643-5	0252-22-2668 (呼) 025797-2061
橋本英一	61C	星電器製造(株) 〒370-01 伊勢崎市下道寺町85-2	0270-32-0869
坂本敦	62院C	〒421-03 静岡県榛原郡吉田町大幡660 大幡アパート 自宅〒368 埼玉県秩父市中村町2-5-17	0548-32-1255 0494-23-0811
越沼敦	62院K	〒211 川崎市中原区木月大町85 元住吉アパートB-8 自宅〒327 栃木県佐野市堀込町307-1	044-733-9778 0283-23-0991
新井通明	62院L	〒361 埼玉県行田市持田2421 〒376 桐生市境野町6丁目1576	0485-53-2274 0277-44-1523
山中卓	62M	横浜市磯子区杉田6-6-15 中小企業共同宿舎杉田寮 142号室 自宅〒407-03 山梨県北巨摩郡高根町清里3545	045-772-4903 0551-48-2403
伊藤信吉	62M	〒361 埼玉県行田市佐間2-16-16	0485-56-2564

小池寛喜	62K	〒566 大阪府摂津市香露園29-27 菱和調温工業千里岡寮 自宅〒377-11 吾妻郡吾妻町大字松谷 582	0726-35-3346 0279-67-3471
伊藤大介	62S	〒211 川崎市中原区上平間327 柏荘 自宅〒239 横須賀市ハイランド2-16-2	044-541-1692 0468-48-7337
藤井修一	62M	〒379-01 安中市磯部3-12-37 桜ヶ丘寮13棟3-1-6 号室 自宅〒371 前橋市下小出町2丁目20-16	0273-85-8519 0272-33-3865
松井一吉	62K	〒370-13 多野郡新井3144	0274-42-2413
長谷川淳一	62W	〒156 世田谷区松原545-9 東松山寮 自宅〒377 渋川市石原1231-8	03-327-7584 0279-24-5298
赤塚靖	63M	〒734 広島市南区向洋大原町12-2 マツダ大原寮 自宅〒371 前橋市前箱田町2-4-5	0272-51-5993
市原敦	63M	埼玉県東松山市神明町2-5-31 自宅〒069-01 北海道江別市大麻高町16-1	011-386-6878



# 部 員 住 所 録

1989年2月現在	現住所・帰省先	電 話
志 村 亨	院2K 〒376 桐生市本町2-2-17 岡田方 〒188 東京都田無市谷戸町3-11-38	0424-22-0699
田 村 健 次	院2P 〒376 桐生市西久方町1-8-23 品川荘 〒370-23 富岡市野上290-3	0277-22-5142 02746-3-5929
古 庄 勝 己	院1W 〒376 桐生市天神町1-1-32 北村方 〒840 佐賀県佐賀市巨勢町高尾159-7	0277-43-8279 0952-26-3014
浅 見 高 志	4C 〒360-02 埼玉県大里郡妻沼町男沼574-1	0485-88-1838
嘉 村 肇 晃	4W 〒376 桐生市本町1-8-22	0277-47-1339
新 藤 洋 一	4E 〒376 桐生市広沢町5-1413	0277-53-3372
糸 井 伸 雄	4L 〒371 前橋市小坂子町710	0272-69-4410
土 佐 融 児	4M 〒376 桐生市天神町1-1-32 北村方 〒184 東京都小金井市前原町4-13-21	0277-43-8279 0423-83-3484
木 村 幸 夫	4K 〒376-03 勢多郡東村神戸528	0277-97-2270
生 形 泰 久	4S 〒376 桐生市浜松町1丁目4-1	0277-47-1423
平 井 智 則	4L 〒369-01 埼玉県北足立郡吹上町富士見4-8-17-1	0485-49-0859
福 島 徳 明	4L 〒370-05 邑楽郡千代田町赤岩180-4	0276-86-2561
井 上 俊 一	工短3 〒376 桐生市梅田町1-63 星野方 〒338 埼玉県浦和市上木崎4-3-3	0277-32-1900 0488-32-5330

堀内 隆	3C	〒376 桐生市天神町1-1-31 北村方 〒247 鎌倉市玉縄5-30-4	0277-22-3998 0467-44-0350
林 慎太郎	2L	〒376 桐生市本町1-3-6 森ハイツA-3 〒376-23 富岡市富岡810-3	0277-46-1889 0274-62-4075
加藤 義広	2L	〒376 桐生市広沢町6-163-15	0277-52-6591
神保 裕紀	2E	〒371 前橋市光が丘町6-12	0272-51-1438
水沼 一英	2J	〒376 桐生市本町1-3-6 森ハイツB-2 〒375 藤岡市藤岡257	0277-47-2282 0277-52-6591

顧問

斎藤 勝男	機械科(材料加工講座)	〒376 桐生市相生町5-102-19	0277-52-0437
-------	-------------	---------------------	--------------

群馬大学仙ノ倉山荘 管理人

剣持 義治	新潟県南魚沼郡湯沢町土樽	02578-7-3080
-------	--------------	--------------

## 編集後記

「皇海12号」いかがでしたでしょうか。記録管理の不手際からすべて掲載できなかったことが心残りですが、山に登った思い出に又今後の活動の参考になれば幸いです。

最近部員の山に対する意識低下が指摘されますが、「安全山行」を見つめ直し、一層有意義な記録を次号に期待します。

最後になりましたが、色々な面で協力していただいた桐生タイプライター、OB会、部員の皆様に厚く御礼申し上げます。

『皇海12号』（1986～1988年）

発行日 1989年3月

発行 群馬大学工学部  
ワンダーフォーゲル部

〒376 桐生市天神町1-5-1

印刷所 桐生タイプライター有限公司